

第58回東京都公民館研究大会記録

主催 東京都公民館連絡協議会

大会事務局 小金井市公民館

目 次

1	第58回東京都公民館研究大会開催要項	1
2	東京都公民館連絡協議会会長挨拶	3
3	東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課長祝辞	4
4	小金井市長祝辞	5
5	基調講演（講師：田中 雅文氏）	6
6	基調講演資料	
7	課題別集会	
	第一課題別集会（町田市）	21
	第二課題別集会（小平市）	33
	第三課題別集会（職員部会）	37
	第四課題集会（委員部会）	46
8	アンケート結果	59

第 58 回東京都公民館研究大会開催要項

地域課題解決学習をつくる

～市民と職員をつなぐ対話とは～

1 開催趣旨

新型コロナウイルス感染症の世界的広がりにより、コロナ禍における新しい生活様式が導入されてから2年近くが過ぎました。

地域でのつながりを作ることを主たる目的としてきた公民館にとって、対面での交流が危険とされ、公民館に集うことができなくなったコロナ禍とは、己の存在意義を根本から問われる年月であったと思います。

公民館活動は学習の成果を実践へと発展させ、地域課題の解決に向けた活動を市民が主体として行えるよう支援する活動です。コロナ禍において、地域課題を解決する学習を実現するためには、対話や交流に基づく新たな連携を作る技術が、これまで以上に職員に、そして市民にも求められるのではないのでしょうか。

今大会では、対話によって自分たちの地域の特徴や課題を見出し、関係者とともに地域に新しい働きかけをつくっていける市民と職員になるため、どのような取り組みや挑戦ができるか、お互いの役割分担とは何かを、それこそ対話によって模索したいと考えます。

- 2 主 催 東京都公民館連絡協議会（以下「都公連」という）
- 3 後 援 東京都教育委員会、東京都市長会、東京都町村会、東京都市教育長会、東京都町村教育長会、東京都市町村教育委員会連合会、小金井市教育委員会
- 4 対 象 者 市民、公民館運営審議会委員、公民館職員、社会教育関係者、生涯学習関係者、その他本研究大会に関心のある方。
- 5 参 加 方 法 都公連ホームページ (<https://tokyokouminkan.wixsite.com/tokoren>) に掲載された、基調講演の動画、ならびに、主催者及び来賓者の挨拶文、課題別集会の事例報告及び助言者のコメントを、各自でご覧ください。
都公連ホームページ
QRコード
- 6 参 加 費 どなたでも参加費無料でご覧いただけます。
動画の掲載期間は、2022年（令和4年）2月24日（木）から2023年（令和5年）1月31日（火）までです。
※動画視聴に伴う通信料については、視聴される方のご負担になります。
- 7 基 調 講 演 講師：田中 雅文 さん（日本女子大学人間社会学部教育学科教授）
- 8 課題別集会 詳細は裏面をご覧ください。

<課題別集会 概要>

テーマ	報告事例概要	企画運営
第一課題別集会 公民館にとってのオンラインとは	コロナ禍で進んだオンライン化ですが、公民館職員の役割として「つどう」「まなぶ」「むすぶ」をリアルで大切にしたい気持ちがあります。一方で、もうオンラインは一つのツールとして当たり前の状況になっています。 そこで、これまでオンラインに取り組んでこられた方々の事例を伺い、メリットとデメリットを整理しながら、公民館としてどのようにオンラインを活用していくのか考えます。 助言者：丹間康仁さん（千葉大学教育学部准教授） 事例報告者： 中泉理奈さん（荒川区地域文化スポーツ部生涯学習課社会教育主事） 萩元直樹さん、井口啓太郎さん、鈴木孝志さん、石田智彦さん（たま社会教育ネットワーク）	町田市
第二課題別集会 社会教育士の役割～いま、公民館に求められていること～	令和2年度から社会教育主事任用資格を得たものが、社会教育士と名乗れるようになりました。 文部科学省では、社会教育士の取り組みの中でも、「コーディネート能力」「ファシリテーション能力」「プレゼンテーション能力」に重点を置いています。その社会教育士の役割を学ぶことで、公民館に期待されていることを考える機会に行きます。 助言者：青山鉄兵さん（文教大学人間科学部准教授）	小平市
第三課題別集会 公民館における社会教育実習のあり方について～大学、公民館、実習生 三者の視点から捉える社会教育実習～	公民館は毎年、様々な大学から社会教育実習生を受け入れています。職員部会では今年度、倉持伸江さんをお招きし、小笠原東生さんの作成された“社会教育実習生受け入れプログラム”をベースに、実習生を送り出す大学と、実習生を受け入れる公民館職員の意見交換をしてきました。今年度実習生を受け入れた町田市生涯学習センターの事例や、実際に社会教育実習を受けた学生の意見も踏まえながら、大学と公民館、三者の視点で“社会教育実習”のあり方を考えます。 助言者：倉持伸江さん（東京学芸大学教育学部准教授） 事例報告者：岩田武さん（町田市生涯学習センター）	職員部会
第四課題別集会 コロナ禍を乗り越えた公民館活動～ピンチをチャンスに～	コロナ禍で惜しくも縮小する活動が多い中、ピンチをチャンスと捉えて市民や学生が共同し主体的に活動した西東京市、国立市、国分寺市の事例をもとに新たな活気ある公民館活動について考えます。 助言者：新藤浩伸さん（東京大学大学院教育学研究科・教育学部准教授） 事例報告者：西原みどりさん（ひばりが丘フェスティバル）（西東京市） 和田幸夫さん（くにたち国際友好会 WING）（国立市） 岩田京佳さん、狩野結さん、堀越慧さん（国分寺市）	委員部会

令和3年度東京都公民館連絡協議会事務局
小金井市教育委員会生涯学習部公民館庶務係
〒184-0004 東京都小金井市本町 2-15-11
電話：042-383-1184 FAX：042-387-1226
E-mail:k020499@koganei-shi.jp

第58回東京都公民館研究大会 挨拶文

東京都公民館研究大会の開催にあたり、第58回東京都公民館研究大会に多数の方のご協力を賜りましたことを心より御礼申し上げます。

新型コロナウイルス感染症に関し、各地で新たな変異ウイルス「オミクロン株」の市中感染が確認され、これまでにないペースで感染が拡大し、その結果各公民館におかれましても日々難しい判断を迫られていることと思います。そのようなコロナ禍において、今年度につきましても昨年度と同様に、基調講演の動画配信、課題別集会のホームページ掲載という形での開催となりました。

今年度の研究大会では、全体テーマを「地域課題解決学習をつくる～市民と職員をつなぐ対話とは～」と掲げ、基調講演及び4つの課題別集会を行いました。皆さまにとってこれからの公民館に向けて実りある研究大会となることを期待しております。公民館は、「地域」と「学び」、「交わり」を主眼に、暮らしと地域をつくる拠点としてその役割を担ってきました。今後もその役割は変わることなく、様々な地域社会の課題を解決する拠点として、より開かれた柔軟でしなやかな取り組みが求められています。そしてその取り組みのツールとして「市民と職員をつなぐ対話」がより一層重要になってくるものと感じております。変化の激しいこれからの社会において、公民館がどのように地域住民の取り組みにかかわり合いながら創り上げていくのか、皆さまとともに深めていきたいと思っております。

結びに、本大会の事務局をお引き受けいただいた小金井市公民館の皆さま、課題別集会の助言及び事例報告をお引き受けいただいた皆さま、また、本大会開催にあたりご支援、ご協力をいただきました関係各位の皆さまに、東京都公民館連絡協議会を代表し、心より感謝を申し上げますとともに、公民館活動がより盛んになることを願ってご挨拶とさせていただきます。

令和4年2月24日

東京都公民館連絡協議会 会長

(昭島市公民館長) 立 川 豊

祝 辞

第58回東京都公民館研究大会が、関係者の方々の御尽力により開催されますことを心よりお祝い申し上げます。

公民館は地域住民同士が「つどう」「まなぶ」「むすぶ」ことを促進し、人づくり、地域づくりに貢献をしながら、各時代の状況に応じた地域住民の学習課題に柔軟に対応してきました。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の拡大が、各公民館で実施してきました諸活動に大きな影響を及ぼすとともに、本研究大会も2年連続でオンラインでの開催となりました。

このような厳しい状況下にあっても、公民館は地域住民の「学びを止めない」を合言葉に、ICT技術を活用したオンライン講座の実施をはじめ、施設の特性や地域の実情などを踏まえるなどして、日々、地域住民の方々と連携・協働しながら取組を進めています。

今回の研究大会は、「地域課題解決学習をつくる～市民と職員をつなぐ対話とは～」をテーマに開催されますが、課題別分科会の一つに「ピンチをチャンスに」というテーマがあるように、まさに現在の社会状況を踏まえ、公民館が新たな地域課題解決に向け、地域住民と職員の対話を一層充実させることを通じて新たな展開を進めて行こうという、公民館関係者の皆様の強い意志が伺える大会であると思います。

基調講演や課題別集会での事例発表等の成果が、各公民館での実践活動につながっていくことを大いに期待しております。

最後に、本研究大会が実り多いものになるとともに、皆様方の御健勝と御活躍を祈念申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。

令和4年2月24日

東京都教育庁地域教育支援部生涯学習課長

倉 富 貴 久

祝 辞

第58回東京都公民館研究大会がここに開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。

本大会に関心を持たれ、ご参加いただく皆様におかれましては、平素より公民館活動を通じて地域活動に取り組まれていることに対し、改めて感謝を申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、本大会は動画配信と東京都公民館連絡協議会ホームページへの文書掲載による開催となりました。

コロナ禍での大会開催は今年で2年目となります。昨年の取り組みを踏まえ、基調講演、課題別集会ともにICTを活用し、工夫を凝らしての開催となっておりますので、それぞれ工夫した点にもぜひご注目ください。

本大会は「地域課題解決学習をつくる～市民と職員をつなぐ対話とは～」をテーマとしております。

地域課題解決学習は、中央教育審議会において社会教育の中心的な概念となるべく示された言葉です。この言葉は、人的交流が希薄化する近代社会において、公民館が行ってきた学びの成果を地域づくりにつなげる機能が新しい地域コミュニティの醸成につながることで、公民館への期待を示した言葉だと考えられます。

長期化するコロナ禍においてこそ、公民館には地域の学習の拠点としてのみならず、共生社会構築に向けた幅広い取り組みの拠点になることを求められているのではないのでしょうか。そして、大会テーマに掲げるように、市民と職員とが対話を深めることで、積極的に課題を発見し、未来に向けて地域にある担い手の力を結集させられると考えます。

本大会での検討が、公民館に関わる皆様が、公民館の目指すべき姿や現代的な存在意義を改めて検討するきっかけとなれば幸いです。

最後に、基調講演をお引き受けいただきました田中雅文先生を始め、課題別集会助言者並びに事例報告者の皆様、そして、大会開催にご支援をいただきました関係者の皆様に、心より感謝を申し上げます。

令和4年2月24日
小金井市長 西岡 真一郎

第58回東京都公民館研究大会 基調講演

地域課題解決学習をつくる

～市民と職員をつなぐ対話とは～

日本女子大学人間社会学部教育学科教授 田中雅文 氏

企画運営：小金井市

地域課題解決学習をつくる ～市民と職員をつなぐ対話とは～

日本女子大学人間社会学部教育学科教授 田中雅文 氏

1 はじめに

皆さんこんにちは。田中と申します。よろしくお願ひいたします。コロナ禍につきマスクしてやりますので、私の目しか見えなくて皆さんには、申し訳ありませんが、口とか鼻もですね、元気に動きながら喋っておりますので、想像しながら聞いてください。

まず初めに、気分転換にちょっと遊んでみたいと思います。両手の人先指を持っただけですか。私も左手を使いたいんですけど、マイクを持っているので、そうすると動きにくいんですが、今からですね、声が聞こえないと思いますが見本を見せます。

人差し指を先につけてください。顔の先につけて、これを、ずーっと離して手が伸びるまで……という風に腕をいっぱい伸ばして、顔の前に置いてください。目線はですね、指を決して見ないでその遠くの壁とか、景色とかを見ていてください。これをゆっくりゆっくり近づけていきます。ちょっとやってみますね。遠くを見るんですよ。

大体20センチくらいまで来たら顔の前で少し上下をゆすって見てください。はい、連なったウイナーソーセージが空を飛んでいるように見えませんか。（笑）これを空飛ぶウイナーソーセージと言います。後でもう一回やってみてください。大体、大人の人にはあまりうけなくて、この間、中学生の前でやったら大うけで、もともと神奈川

県の青少年支部の活動の中から、アイスブレーキング、プログラムには動画でDVDになっているんですけど、それをちょっとお借りしてやってみたというところです。

それでは今日は地域課題学習を作るというテーマでお話ししますので、私の声と共に時々レジュメが出るとお思いますから、それも見ながら聞いていただけるとありがたいなと思います。

地域課題の学習というテーマですが、地域課題って何ですかね。ここの地域の課題、ここの地域の課題、それぞれもちろんあるんですけども、今の時代はかなりグローバル化が進んでいるので、例えば、小金井市の課題、武蔵野市の課題、小平市の課題、それぞれ課題がありますけれども、その背景にはかなり全国レベル、世界レベルでの問題があるんですね。その辺をちょっと今から確認をしてみたいと思います。

例えば少子高齢化ですよ。人生100年時代ということで、生き生きと高齢化を進んでいこうということになっていると思いますけれども、実際には子どもたちが少なくなっていて出生率が下がり、平均寿命が高いレベルで維持されているのは良いんですけども、働き手も数的に減っていくとですね、難しい問題もあるわけですね。地域の中で子どもたちの数が減るって、元気な子どもたちの声が聞こえる地域は良いなあと

思っている人にとっては、寂しくなってくるかもしれない。こういう時代をどういう風に良い地域にしていくかということですね。

それから次に、三多摩地域、多摩地域も都市化がずいぶん進んでいて、かつてあった豊かな自然環境がどんどん壊れていくということがありますよね。そういう中で、人と自然の関係をどのように作っていくか。私のイメージでは、是非、生物多様性都市というのを、多摩地域各市町村は目指していくということが良いなと思うんですね。生き物がいっぱいの中での都市生活、素晴らしいと思いますけれども、例えばそういうような課題がある。

今は新型コロナウイルスが非常に、この時点では少し収まっていますけれども、またこれから第6波が来るかもしれないとか、いろいろ問題があります。新しい生活様式なんていう風に言われていますけれども、要は人とあんまり会わないというようなことが中心になっておりますので、孤立とか分断とかそういうことがとても心配なわけなんですね。そのために、公民館での出会いというのは非常に貴重なんですけれども、感染が広がると、その出会いも難しくなってくるというようなことがありますので、そのあたりどう考えるかですね。

一方で何年も前から、AIがいろんなことをやってくれる、ということが言われています。でもそういう中で我々人間はですね、実は自分自身の個性とか、人としての尊厳をどうやって保つのか、これもまたとても重要な課題になっていると思います。

さらには、これもずいぶん以前から問題になっていますけれども、いろんな面での格差が起こっています。経済的な格差、もう貧困の問題は本当に待ったなしで大変な状

況ですよ。それから教育の格差、さらには情報格差。コロナで、オンラインが奨励されていますけれども、オンラインの使用状況が進むとともに、デジタルデバイドと言いますけれども、情報の使える人、使えない人、高度情報という、ITとかICTを使える人、使えない人で相当の差が出てくる、というようなことがあるんですね。

これらの問題は、背後にグローバリゼーションというものがあって、良い面ももちろんあるんですけれども、同時に格差を生みやすいとか、新型コロナウイルスの問題自体が、グローバリゼーションによって世界規模に感染した、そういうことがあるわけなんですね。

そういう中で、地球全体で目指しているのがSDGsというものです。持続可能な開発目標というもので、17の目標があって、誰一人取り残さない、という考え方のもとに進められているということです。誰一人、というと人間だけみたいですが、十何番目かにはですね、海の豊かさ、陸の豊かさもありますから、やっぱり生き物を大事にしよう、生物多様性がとても大事なんですね。

人だけではなくて、生き物の世界も大事にして、だからこそ人も支えられていくということになるんですね。そういう生き物の自然環境を含めて、これから世界が持続可能な形で維持されていくためにはどうすれば良いかということで、具体的に17の目標のもとに各地域、そして、子どもたちの学校教育でも、SDGsが非常に課題として、学習課題として取り上げられるようになってきているということですね。公民館でもこういう分野の学習をしていって、大人も子どもも一緒になって持続可能な社会の在り方を目指して考えていくことが大事だと

思っております。そのための対話が大切だと思うわけなのですね。

このような地域課題というか、地域に課題をもたらすような、大きな動きがあるわけですね。これはこれで先ず頭に入れておいて、公民館の学習活動って、どういう意味を持っているのか、次に行きたいと思います。

公民館での学習活動の意味とレジューメには書いておりますけれども、学習は基本的には一人一人が、自分の中で振り返りながらやっていくものだと考えれば、それぞれの人の人生が豊かになる、これなくしていったい何のための学習なんだということですね。

一人一人の人生が豊かなるというのは、自己実現とか、色々な意味で能力が高まっていて、職業的に能力も高まるし、そしてまた、趣味の力量も高まっていくという、あらゆる意味で自分自身の持っている可能性をどんどん広げていくと。ここでは開花と書いているんですけれども、花が開くように、自分の可能性が広がるということです。

これはあくまでも個人レベル、と思うかも知れませんよね。一人一人が元気になれば実は、社会的な利益も大きくて、お年寄りが病気にならなくなれば、公的な医療費は減っていきますよね。それから、子どもたちが元気に学んでそして、生き生きと過ごすようになれば、非行とか、青少年犯罪は減りますね。そうすると警察の方も費用はぐっと減りますね。

ですから、結果的には一人一人の人生が豊かになる、ということを目指すことによって、公的な経費も削減されていくということがあるわけですね。そういうことも含め、活気ある社会、これはお金の問題だけではなくて、一人一人が豊かになって元気に

なれば社会全体が活気づく、ということもあるわけですね。ですから、一人一人が元気になることは、社会全体にも良いことなんだ、ということがまずはあろうかと思えます。

目に見えてこんなに良いことが起こったということが見えないと議会でも、どうして公民館はこんなにお金をかけるのということが出てきかねない、ということで、我々としてはですね、一人一人の人生が豊かになるだけではなくて、いろんなレベルの繋がりが豊かになる。コミュニティの形成にも繋がっていくということが、とても大きなことになるかと思えます。

ここでは新しいつながりと書いてありますが、主に異なる立場の人たちのつながりをここでは書いてあります。異世代間とか障がい者と健常者とか、それから異文化間、外国人の方と日本人の方ですね。いろんなレベルでつながりが豊かになって、コミュニティが充実していくということですね。そういうコミュニティの拠点として、公民館がこれからもっと機能していくべくということかと思えます。

3番目にはですね、つながって仲良くなるのは良いんですけども、具体的に地域はどう良くなっていくのか。もちろん異世代間の交流であるとか、障がい者と健常者のつながりとか、外国人と日本人が仲良くなって一緒になって連携していくこと自体が地域を良くしていくことになっていきますけど、そのようなつながりのレベルだけではなくて、さらにいろんな問題が解決されていく。

例えば地域の環境問題であるとか、独居老人の方に対してどうコミュニティで支えていくとか、国際交流がどう展開されていくとかですね、子育て支援の活動がど

のように実際の子どもたちの健全育成に役立っていくとか、具体的なそれぞれの地域の課題に役立っていく学習が求められているわけですね。

ですから今日のテーマの地域課題解決学習というのは、主に（３）あたりに焦点が当たっているものと考えていくのではないのでしょうか。生涯学習論とか、社会教育の世界では、学習成果の活用とかですねそういうことを言いますね。公民館で学んだことを地域で生かしていく。

一方で、いろんな市民活動が地域の中にあるかと思いますが、こういう市民活動は本来地域の課題を解決するために活動しているわけですね。ですから公民館の活動とそれからNPOとかいろんな市民活動団体が連携しながら地域を良くしていくことが、大切になってくると思っています。

こうやって見てみると１、２、３というのは一言でいうとこんな感じですよ。「ひとづくり・つながりづくり・地域づくり」こういう語呂合わせみたいなキャッチコピーを、文科省が２０１８年に出した方針の中で呼んでいるんですね。ひとづくり・つながりづくり・地域づくりという風に称しています。

さらにはこんな言葉も答申の中には書いてありますね。「学びと活動と直感」要するに学ぶということと、実際の地域づくりの活動が、相互に高めあうと。何か環境問題を学んだら地域で活かしていく。活かして活動していくとまた新しい学習課題が発生していきますので、また学習すると。

学習して高まったら、さらに活動が豊かになる。豊かになるとさらに新しい高いレベルの学習課題が発生してということで、学びと活動の循環ということがひとつの考え方になっていますけど、今日の地域課題解決学習をつくるということ、ただ学習し

て解決するということだけではなくて、解決する活動自体が学びであるし、そういう活動を通して新しい学習課題が出てきて、また学ぶということなので、まさに学びと活動の循環というものが地域課題解決学習にはあるわけですよ。

そのように公民館での学習活動というものを、３つのレベルで捉えることができる。まず一人ひとりが豊かになって、そういう人がつながって、さらには地域課題の解決につながるように３段階の接続というのもあるわけですが、活動の内容によってはいきなり地域づくりから入ってですね、そういう中でつながりができて、それを通して一人一人の生きがいが生まれてくるところもありますので、１から３まで順番に行くということだけではなくて３から２、１というように２から始まって１を経て３とかいろんなパターンがあるわけですね。学びの多様性ということで考えていただければいいかと思います。

いよいよ対話という問題に入っていきたいと思いますが、現代における対話の危機ということですが、我々の生きている社会の歴史を振り返ってみれば、大きくこういう風に変わってきたと捉えるように考えることができるのではと思います。

まず、伝統的共同体、例えば日本全体を見ますと、農村社会であるとか都市でも下町のコミュニティですね。そういうところはもともと非常に強いつながりでみんな相互扶助でやっていたと。現代の都市生活者から見ると、ちょっと堅苦しいですとか、閉鎖的とか、あるいは出る杭は打たれるのように、個性がバンバン輝いてくるというよりは、地域のしきたりとかですね、昔からやってきたことに沿っていく傾向が強いということが言われますよね。ですから社会のこ

とを考えるのが、社会のつながりですね。そういうものがある一方で、個人個人の個性はそれ程尊重されていなかったと、ということが言われるわけですね。

それが伝統的共同体、エリア型のつながりともいう呼び方をすることもありますけど、そういうようなところから、現代の我々が生きている都市社会はどちらかというと、個人個人が非常に尊重されるということですね。だけでも社会的なつながりというものが、昔の伝統的共同体に比べると切れているということが言われますね。

これは東日本大震災の後、しきりに「つながり」とか「絆」と言われていますけど、まさに我々は孤立という問題に直面しているわけですね。大震災を経て急に言われるようになったということは、もちろんありますけど、その前からNHKは縁が無くなるという意味で「無縁社会」という言葉で番組を放送していました。だから、もともとつながりが難しくなっていたんですね。そこへ震災が来たので、つながりの重要性というのが、非常に強く我々が意識するようになったと思います。

だからこそ述べられているものが、新たなつながりといいますか、個性が尊重されながらも社会的なつながりも大切にされる。欲張りというか、両立するというそういう世界を我々は求めながら、つながりとか絆とか言っているんだと思うんですね。個性を無視してつながりだけでいこうという意味で我々は絆とかつながりを言っているわけではなくて、個人が大切にされながら、個人個人がつながっていかねばいけないでしょうということですね。

例えばボランティア活動は、特定のテーマのもとにみんなが集まって、それで連携しながら活動していきますね。本当に自分

はこのテーマに関心があるということでそういう人たちが集まって、つながりをもって、みんなで協力しながら課題を解決するわけですね。

だからNPOとかボランティア団体の状況は、ここでいう個人プラス社会プラスの世界になっていくわけですね。あるいは公民館で活動しているサークルなどは自分自身の関心のあるテーマに基づいて、グループが作られていますね。そこでみんなでつながって、活動していますよね。公民館の学習グループも、ここに位置するわけですね。

個人プラス社会ということで、こういう伝統的共同体のどちらかというと個性が強調されないようなつながりが、いったん切れ始めた。そこで新しく我々はつながりを新しくまた求め始めた。それは個性を大切に作るつながりだと。その具体的な例は、NPOとかボランティア活動だとか、公民館の学習グループなどに見られるんではないかなと思います。そういうイメージでこの図を見ていただけたらいいなあと考えております。

この対話の危機とタイトルに書きましたが、実は衝撃的なデータがあるんですね。時々行われる内閣府と文部科学省が連携して行う学習意識調査です。2018年に行われた調査の結果を載せています。ちょっと細かいので見にくいですがすみません。これはコロナが起きる前ですね。2018年ですから。

どういう特徴が見えるか、この一年間の学習の形式です。どのような学習の仕方をしたかですね。見てみますとインターネットがトップです。そのあと職場の教育研修、次が自宅での学習活動、次にテレビやラジオ更には図書館博物館と続きます。先

ほど例に出した公民館の自主学習グループはどこにあるかという、ぐっと落ちて、その他の上の上ですね。同好者が自主的に行っている集まりとかサークル活動。じゃあ公民館はどこかという、同好者の集まりも公民館で行われたりすることが多いわけですが、公民館が主催講座のような形で提供する講座とかいろんなことですね。

これは何を意味しているのかという、いわゆる個人学習といわれるものが、上位をぐんと占めているわけですね。3、4年前に行われた調査では、インターネットはもっと下でした。公民館の学習とか、カルチャーセンターとか、サークル活動がもっと上にいたんです。それがこの3、4年の間に一気に下位に下がったということです。学習の形式を分類してみたものがあるので、そこに挙げていますね。

まずは個人学習、学習者が教材や各種媒体を用いて一人で行う学習、インターネット学習がそれにあたります。それから集会学習、講師がほぼ一方的に提供する情報を受講者が受け取る形態。いわゆる講演会がそうですね。それから3番目が集団学習、集団における学習者同士の相互作用によって発生する学習。サークルとかですね。そういう学習ですね。

対話という面で考えると、この3番目が良いわけですね。対話しながら学習していく。インターネットで学習は個人学習と書いていますけども、実は今はテレビ会議システムが発達していて、例えばZOOMとかいろいろありますよね。そういうオンライン型の集団学習といえるものも出てきているので、インターネットの学習＝個人学習ではなくなってきたことは事実です。ただ、先ほどのアンケート調査の結果、あれは2018年です。あの時点でのインター

ネットはほとんど個人学習とっていいと考えています。

先ほど見た内閣府と文部科学省が連携して行っている全国調査ですね。あの結果からちょっと抜粋して下に載せました。2014年の調査では、サークルでの活動が34%ありました。インターネットでの学習は19%でした。それが先ほどデータでみたように2018年はサークルが14%に減り、インターネットがなんと39%に跳ね上がったということですね。（分母を回答者全体として補正したため、図1の数値とは異なる。）

コロナによって我々はオンラインをどんどん使うようになったと言われていて、その前に既にインターネットの学習は広がっていたということですね。この辺り我々はきちっと頭に入れておかなければと思います。ですから、対話という面で行くと、我々の日本人の学習はですね、対話から遠ざかる学習形態にどんどん移ってきた、という経緯があるんです。

そこで今日のテーマ「地域課題解決学習をつくる」ですけど、サブタイトルは「市民と職員をつなぐ対話」と。だから職員と市民が対話しながら地域課題学習を推進するというイメージが今日のテーマ、お話のテーマだと思うのですが、地域課題解決学習は、市民と職員の対話だけでやれるか、地域の課題がそんな簡単に公民館の利用者と職員だけで解決できるとか、そういう学習が成り立つとかではなくて、もっと幅広いいろいろな人々とのつながり、ネットワークが必要なわけですね。

それを考えて地域課題を念頭に置くと、市民と職員を核とするネットワークがとても大切なことで、まずNPOとか市民団体、この人たちは地域のいろんな課題に挑戦し

ていますよね。だからこの人たちと連携せずして、地域課題学習で何ができるかっていうのも、極端な言い方ですけど、連携することによってますますよくできるということですね。だから市民と職員のつながり、対話がコアになりながら、NPOや市民団体とも連携していくと。地域の課題によっては企業、特に地域の企業が関係している場合も多いですね。

それから町会とか町内会、自治会と言われる、地域の地縁組織でございました。そのあと、一般行政の、いわゆる地方自治体の中の主に教育委員会以外のいろんな部局ですね。

それからPTAや学校ですね。この辺りにあるいろんな組織・団体とつながりながら、市民と職員の対話が地域の解決に向かっていくことがとても大きなポイントでないかと考えるわけです。NPOとか市民団体は、地域のいろんな、あるいは社会の課題解決するために活動しているわけですが、実はそういう団体が社会教育の団体としても実は機能を果たしているということがあるわけですね。

そこで次のスライドに行きます。内閣府のデータで今年の8月の時点では、約5万、法人化されたNPOですね、特定非営利活動法人がありました。それを分野別にみると、こういう風になっています。一つの団体がいくつかの分野で活動しているので、足したら100%をはるかに超えます。これで行くと保健福祉58%、社会教育はなんと第2位で48%、大体半分のNPO法人は社会教育をやっているんですね。

具体的には講演会をやっているとか、ワークショップをやっているとか、学習会をやっているとかですね。そういうことすべて社会教育です。だからNPOというのは、

いわば社会教育の団体であると言ってもそう過言ではない、と言えるんですね。例えば環境保護団体であれば、自分たちの活動を活発にさせて、人々を誘い込み、そしてまた人々を啓発するために講演会を行ったり、ワークショップを行っているわけですね。

それから福祉の団体でもそうです。やはり介護の方法であるとか、福祉社会の行方とかですね。学習の場を市民に対して開いているわけですね。ですから社会教育を実践している団体、非常に多いです。

ただ、次のデータちょっと古くなっていて、内閣府がその後この調査をやっていないのでこの時点のデータですみませんが、出させていただきます。主となる活動として一つだけ挙げるなら何ですかと聞いてみると、ぐっと社会教育は下がって、わずか3%になります。

だから社会教育を主な領域でやっている団体は少ないのだけれども、多様な課題に取り組んでいるNPOのかかなりの部分は社会教育もやっている、むしろ社会教育を方法論として、自分たちのミッションを解決しようとしているというようなことですね。そのあたり、NPOの社会教育機能というのですね、ちょっと頭に入れていただきたいと思います。これが地域課題解決学習をつくるというときに大きなポイントになります。

そういう中で公民館はいったいどういう条件を備えている必要があるのか、それをいくつかの側面から確認していきたいと思います。

新しいつながりを広げる。先ほど、公民館の中での活動というものがありませんけれども、新しいつながりを広げていくと、公民館を拠点にコミュニティができる。これはもう皆様方、公民館関係者は当然のように

取り組んでいると思うし、文部科学省だってそうっているし、これはとてもポイントになりますよね。そういうつながり、人と人のつながりを広げるだけでなく、もう一つは機関とか団体の間のつながりも広がっていく。

先ほど絵がありましたけれども、あれをイメージしていただけると良いと思います。NPOとか企業とか自治会とか。それから学校とかPTAとか一般行政ですね。これらをつなげていく、ときにマルチステークホルダープロセスなんていう言い方をする時があります。

要するに利害関係者がたくさんね、そういう方々がうまく連携して協力しながら進むのが良いんだ、ということを表す言葉として、マルチステークホルダープロセスというような言葉が使われますけども、そういうプロセスの要として公民館が位置づいて、地域のいろんな機関団体をつなげながら、地域課題の学習を推進していくという部分が求められるというような意味です。

その次ですね。人々のつながりとか、地域の機関団体のネットワークというのを言いましたけど、次に大事なのが公民館というのは職員の方がおられて、その方が何か提供するものを住民が利用するというだけではなくて、公民館運営そのものに住民が関わりながら、職員と一緒にあって公民館を良くしていくということが大切だと言われますよね。

だから住民参画という言葉で書きました。いろいろな広報であるとか、そういうものを一緒にやっていくとかですね。公民館、地域によっていろいろありますよね。こと業企画を全部市民がやっているとかですね、広報も市民参画でやっているとか、地域によってそれぞれ特色ある住民参画の仕組み

を整えてきていると思いますけども、やはりそれは大切なことだということです。

見逃されがちかも知れないのが、4番目ですよね。行政全体の中に公民館が組み込まれていて、必ずしも社会教育に関心があるとか、基礎基本ができているというという方ばかりが異動で来られるわけではなくて、全く知らない方も公民館に来られて、何年か働いてまた行政本体に戻って行く、という異動がありますよね。

そういう異動が盛んになってきたとき、公民館を職員教育にもっと利用していくとは重要ではないかということです。長野県の飯山市なんかは、公民館に職員が移動して、そこで地域を学ぶというようなことで、職員の異動全体のシステムが公民館に組み込まれています。

公民館というのは住民と接する最前線ですから、そこで住民とのパートナーシップとか、住民が一体どのような考えを持っているのか。住民には住民の文化があります。行政には行政の文化があります。そこはうまく擦り合わされなければ地域づくりはうまくいきませんので。それから市民を理解する、住民を理解するために公民館職員として何年か働き、教育訓練の場として公民館が利用されていくことは、一つの考え方として大切ではないかと思うわけですね。

それでは最後。これは絶対的に必要ですね。各地域の公民館でできるわけではなくて、行政本体の方で予算化してもらわなければいけないので、我々公民館関係者は連携しながら公民館にWi-Fi導入という、まだ行われていない地域はどんどん導入していくというWi-Fi導入運動を起こさなければいけないと思っているくらいです。

そうしないと若い世代はどんどん逃げちゃうわけですよね。今やWi-Fiがない

公共施設には人々は足を踏み入れない、とは言いすぎですけど、そういうようなWi-Fiがとても当たり前のような基盤になっているということですね。

住民が何か会議をやろうとしたときに、ネットにつながっていて、その情報を得ながら会議するとかですね、やはりそういうことが頻繁に行われるということですね。それから講座とかシンポジウムを開くときも、やはり九州の人がパネリストになるとかですね北海道の人がパネリストになるとか、あるいは国際化の時代だからどここの国の人がZOOMに出て公民館の学習講座、シンポジウムに参加してみるとか、やっぱりこれからそういうことがどんどん行われていく時代になるわけですね。

ですから全ての公民館にWi-Fiを導入するという運動を我々は起こさなければいけないという風に思っています。ですから、公民館の基礎条件の最後にこれを書かせていただきました。

ただそうは言っても、最後に書いたように情報格差の問題がありますので、Wi-Fiが使えない人は公民館で肩身が狭いとかそういうことは決して起こってはいけませんので、Wi-Fiを利用する人は利用し、だけどそれと関係ない活動する人にはちゃんと活動権利が与えられているということが大切なわけですね。そういう条件として満たしながら、いったい、どんなことを公民館でやっていけばいいのかを対話とか交流を少し頭に入れながらですね。

最後にいくつか問題提起して終わりにしようと思っております。ということで、公民館の可能性と書きました。対話交流を中心としてと。まずひとつはですね「公開討論会」、よくなんとかフォーラムって言いますね。それを開催する。

例えば私は武蔵野市に住んでおりますけど、武蔵野市は、いろんな経緯があって公民館が無いんですよ。社会教育の終焉論なんかを唱えた方が、実は武蔵野市の長期計画の委員なんかをやっておりました。ということもあり、いろんな影響で武蔵野市には公民館がありません。

でも、公民館ではないんですけどコミュニティセンターが市民運営で16館市内にはあって、そこが地域フォーラムという名称で地域課題をみんなで学びあう、ということをやコミュセンを拠点にしてやるということで、行政もそれを推進し、で地域の人々もそれを進めているわけですね。

私も武蔵野市で雑木林の保全活動をやっている、雑木林の危機的な状況が東京都全体に起こっていますが、武蔵野市の雑木林もそうなんですね。これを考えようということで、4回連続の地域フォーラムを開いて、多様な人が来て意見交換をしたり、講師を呼んでレクチャーしてもらったり、最後は行政担当活動に来てもらって、いろいろ意見交換したりしました。これがまさに学びだったんですね。

これまで雑木林に関心を持っていなかった人が、かなり関心を持つようになってきて、雑木林は切って、若返らせて維持するのが基本ですけど、木を切るってことに抵抗がある人もいっぱいいるわけです。このフォーラムを通してその抵抗感がなくなっていった気もいたしました。

ですから、例えば雑木林を守ろうという地域課題に対して、こういう討論会みたいな形式で、みんなで学ぶことは一つの形として重要だと思うし、コミュセンは地域を活性化するためにある施設ですから、当たり前のようにそれをやりましたけど、公民館は公民館で学びの拠点で、地域を良くす

るための学びの拠点ですから、こういうフォーラムを、どんどん地域の課題をテーマにして、多様な人が集まる。

そこにNPOの人もやってくるとかですね、何かそういうシンポジウムでも良いですし、そういう討論会でも良いですし、何かみんなで議論しあえるような場を公民館で企画して、特に住民によって実行委員会か何か作ってあれば、お互い誘い合えますから。

そういうことをやり、またそれもオンラインでも参加できるようにしていくと、かなり地域課題を考えるための拠点に公民館はなっていけると思うんですね。そういうことが一つあるかなと思っています。

もうひとつはNPO活動センターみたいなところが、あるいはボランティアセンターみたいなところがよくやることだと思いますけど、NPOとかボランティア団体とかブースを出して、それでボランティアフェスタとか、NPOフェスタとかそういうことをやりますよね。

そういうのを公民館だってやって良いんじゃないかということです。要するに地域課題の学習に取り組むためには、地域課題に取り組んでいる団体の方々が一同に集まるというのは大切なことで、そういう団体の方々は常に仲間を求めているわけですね。参加者を。だからPRの場に公民館を使ってもらって、公民館でそういうブースを出してもらって、地域づくりフェスティバルみたいにして、市民団体とかNPOが出店して、PRする。

それを公民館の社会教育とどうつなげるかですけど、それが結局市民にとっても学びにもなるわけですね。ですから、地域を学ぶという趣旨でやるんだ、ということで、NPOとかボランティア団体に出店しても

らう。で、それをどんどん公民館でやって良いんじゃないかと思いますよね。NPOセンターとか、市民活動センターに、連携してやりましょうと。コラボでやればいいので、そういうことを考えても良いんじゃないかと思いますね。

さらには、職員と市民の対話ということを見ると、最近よくいろんなところでやっているカフェですよね。すでに公民館でもやってらっしゃると思いますけど、やっぱりカフェで人が集まるにはコーヒーが美味しくなきゃダメですね。インスタントコーヒーじゃなくて、ちゃんとドリップか何かで入れて、美味しいコーヒーを出して語り合おうということですね。

ヨーロッパの市民社会の起こりはカフェだという風に言われています。ミニ資本家みたいな人たちが、カフェに集まって情報交換して、自分たちの活動の輪を広げていったんですね。だから公民館がカフェになって、いろんな活動をしている人が集まって、学びあう。まさに学びの拠点。学びあいの拠点としての公民館が、こういうところでも活用される。そういう風に職員も自由にまじりあってですね、フリーに意見交換するというのが良いのではないかということです。

いきなりそうがく（44：08）が出てきましたけどこれは何かって言うと、高等学校がかなり変わってきています。新しい学習指導要領で、「公共」という科目が生まれて、これは従来の現代社会みたいな学を中心ではなくて、これからの社会をどうするか考えるという科目になっております。

公共。それから高等学校の総合的な学習の時間は、総合的な探究の時間で、じっくりと考えていく。例えば地域課題を考える、そういう時間になっているわけですね。です

から、公民館がその高校生の地域課題を学ぶ場を提供していく。あるいはプログラムを提供する。NPOと連携しながら地域課題を学ぶためのプログラムを作って、高等学校に提供していく。出前講座をやっても良いし、公民館に来てもらってやっても良い。

PBLという言葉が時々学校教育でよく使われますかね。Project based learning っていうんですね。要するにプロジェクトをやりながら学んでいくということです。子どもたちの実践的な学びとして、学校教育ではとても大切にされています。こういうことを公民館でも地域課題を学ぶということで、プログラム化していくということも良いんじゃないかと思います。現地調査とかですね。高校の授業、公共とか総合的な探究の時間を、新しい指導要領から抜粋して後に載せますので、またご参照ください。

最後に、「オンライン型の対話交流システムの開発」と書いていますが、今まで言ったようなことを、全部オンラインを入れながらやっていくということが当然あるわけなので、そのあたりオンラインをいろんなシンポジウムやフォーラムやカフェとかを活用していくことによって、なかなか公民館に来られない人も参加できるので、良いのではないかなあというようなことです。

ここに書いていますが、公開討論会の登壇者もオンラインで参加してもらうとか、それから地域課題のフェスティバルを開くとしたら、自宅でそれを鑑賞できるとかですね。それから公民館カフェにもZOOMが何か使えるようにしておいて、在宅の人とカフェに来た人がZOOMを通して意見交換するとかですね、いろんなことができようかなと思っております。

後は先ほど言った「公共」ですね。これは

指導要領からとったものです。それから「総合的な探究」の時間。ということで、以上で私の話を終わりにします。どうもありがとうございました。お疲れ様でした。

○司会

田中先生、大変素晴らしいお話をありがとうございました。公民館職員の目指すべきあり方の検討や、これから市民と対話する力を高めるために、非常に参考になる内容をうかがえたと思います。それではですね、短い時間ではありますが、会場から質問を受け付けたいと思います。先生にお伺いしたいことがある方は、挙手をお願いいたします。

○質問者1

こんにちは。今日は地域課題に即した様々な投げかけをありがとうございます。それで今回のテーマは、市民と職員をつなぐ対話ということがありますので、その方法について教えていただこうかなと思っています。どうやって市民や利用者の方に気づきを促せるか、促していくのか。

あくまでも市民や利用者の方がいつまでも受け身的であっては地域課題解決にはならないと思っています。いずれは能動的な方になってもらうためには、どうやってアプローチしていく、もしくは質問していく、何か良い方法があれば教えていただければと思います。よろしくお願いします。

○講師

ありがとうございます。地域課題って公民館の中で把握できるわけではなくて、やはり地域に行かないと、地域の中で、実際に触れてみる、という事が大事ですね。

先程話題に出しました、私の地元の武蔵

野市で行った、雑木林を考えるフォーラムですけれど、4回連続通しの1回は実際現場に行きました。現場に行って、ナラ枯れの状況を見ていただいて、どういう木が枯れていて、どういう木が枯れていないか、そういうことを皆さんに見ていただきました。

地域課題に関心を持つとか、学習に取り組むのは、俗によく言うような当事者意識ですね。当事者意識を持ってもらわなければいけない。という事は、やっぱり自分事としてとらえてもらうという事ですね。

その問題が自分にとってどういう問題なのか。例えば雑木林であれば、お子さん持っている人であれば、全部枯れちゃったらドングリが拾えなくなるね、それから野鳥が好きな人にとっては、もう鶯は来てくれないんだとなります。

その人にとっての雑木林の意味はそれぞれ違います。それぞれの立場から、本当はこれ大変なんだ、という事の実感を持ってもらうのが大事なんではないかと思うのですね。だから先程、現地調査っていう言葉を出しましたが、地域課題は、実際その課題に触れるっていう事から始めるので、公民館自体は施設であっても、地域課題を学ぶきっかけとしては、地域に出る、という事も大事ではないかなあという気がします。

それだけではなくて、教室の中で把握できることとして重要なのは、数字で先ずは見せることですね。こんなになるんだとか、人口の構成であれば、よくあるピラミッド型構図とか連続的に出すと、皆さん、驚いたりするんですけど、ビジュアルなものであったり、図とか数字とかで提示することによって、これはただ事じゃない、という風に思い始めるという事がありますよね。

どちらにしても、その人その人のご自身の問題とつないで考えるという事ですよね。

昔から公民館は、生活課題から地域課題へというような事が言われたりしましたけれども、生活課題というのは自分の課題、けれども自分の課題は自分だけの課題ではなくて、地域全体の課題でもある、ということで生活課題から地域課題へと言われたりしますが、それと同じように、まずは自分の事として捉えていただくことがスタートかなと思っております。

○司会

ありがとうございます。他に先生にご質問されたい方は、いらっしゃいますでしょうか。

○質問者2

貴重なお話ありがとうございました。今日のお話の中で、高校の授業、公共または総合的な探求の時間との連携というお話をいただきましたが、現在公民館では、中学生、高校生とのつながりが薄い状況になっております。これは中学生、高校生と関われる大きなチャンスになると感じたんですけど、具体的にどのようなことが考えられるのか、先生のご関係でもいいですけども、もし何かあればお聞かせいただければと思います。お願いします。

○講師

それぞれの公民館のある地域の特色によって、それは変わってくるのかなと思います。自分の市民活動をやっている経験からいくと、先程の雑木林の活動ですね、この雑木林の活動は我々大人、地域の大人が主にやっているんですけども近くに都立武蔵高校というのがあって、東京都がいわゆる「奉仕の時間」という事で必修にした時期がありました。

あれは十何年前ですね。それがずっと継続的に続いたりして、「奉仕」が授業になった時に、我々の団体が都立武蔵高校から10人の生徒さんを受け入れて、それで森の保全活動に参加していただきました。

それは主に奉仕体験活動なので、探求ではなくてその前段階のまず汗水流す、という段階ですね。我々の団体は、武蔵高校の理科の先生と連携していて、雑木林とは何かというのをその先生の授業で扱っていらっしゃるんですね。

今はまだ、総合的な探求の時間までは行っていませんけど、生徒さんたちに雑木林に来てもらって、今の状況を見てもらって、課題も把握してもらって、どうすれば良いかという事を我々と生徒さんたちと一緒に考えていく。それで、その考えた成果を生徒さんが授業で発表する、そういう事であればできるのではないかと考えています。

それぞれの地域で、例えば農地が広がっているような地域であれば、都市農業の問題を生徒と一緒に考えていく、という事はあると思うし、ただ、農業者と生徒さんが一緒になっただけではなかなか進まないと思うので、農業問題を考えているNPOとか専門的な方に協力していただきながらやる、という事だと思うんですね。

地域にどういう課題があるか、というのを把握しながらその課題と生徒をつなぐ、それでつなぐ時にそれを深い学びにつなげるために、ある程度の専門的な人材が必要になると思うのですね。そのようなことを考えると公民館の職員は常に、いろんな分野の専門家と関係を持っていなければいけない、という事が自分の課題として浮かんで来るんじゃないかと思うんです。

何かやらなきゃいけない、高校と連携して総合的な時間をやろうと考えると、その

プログラムを組むためには自分が持っている資源が必要になるんですけども、その資源が豊かであればあるほど、いろんなことができるというわけですね。

だから常日頃からどういう人と連携すれば良いとか、地域の何を課題として取り上げれば良いのか、そういう上でいつも地域とかメディアに接していると自分のネットワークが豊かになるんじゃないとそういう風に思っています。そんなところでよろしいですか。

○司会

ありがとうございます。では最後の一問にしたいと思います、いらっしゃいますか。

○質問者3

貴重なお話をありがとうございます。公民館の職員ですが、なかなか地域に出ていくっていう人間力といいますか、そこがやっぱり私は大事なかなと思っております。いろんなことに興味が沸く職員だったり、好奇心旺盛な職員、人との関わりを持ちたいと思っている職員、こういった職員が必要になると思うんですが、現実その市の人事当局からすると、社会教育への理解がちょっと弱いかなと私は感じていて、人材不足という所も否めないかなと思っております。

予算もコロナ禍のこともありながら、脆弱化に社会教育に対する財政当局の理解不足も否めないところがあるんじゃないかと思っておるんですけども、そういう事を含めながら考えていくと、公民館って、職員が地域課題を見つけていく、その糧となるものをどう育てて、個人的に素質をどう高めていくか、公民館組織としてどう高めていったら良いのか、という所を私は常日頃

疑問に思っているのですが、それに何かお考えがあればお聞かせ願いたいと思います。

○講師

ありがとうございます。とても大事なポイントだと思います。以前、福生市の伊東静一さんという、元公民館でずっと仕事をされた方と話をしました。伊東さんが公民館に赴任した時、まず地域全部を回ったと言っていました。

今まさにおっしゃった通り、公民館職員である限り、まず地域を知らなければいけない。どこに誰が住んでいて、人々のその地域での暮らしを肌で感じられるような職員にならなければいけない、という事で、とにかく地域をくまなく歩いたと言っていました。

伊東さんは、非常に意欲的な方で、好奇心の強い方、自らそうやって歩いて把握していったわけですね。そういう中で、単なる学びではなくて、地域に役立つ地域づくりと学びの関係を、公民館でとにかくつなげていこうという事で、ずっとやってらっしゃったわけですね。

今おっしゃった趣旨の一つは、そういう人なら自分でやれるけど、でも、例えば若手職員が一般行政から配属されたときに、この人がどうやって地域課題を理解し、考える人になってもらおうかと、それが結構大変なことだと思うんですね。

個人個人のセンスみたいのもあるし。若い人であればあるほど、何か自分が役に立って褒められたっていう時、すごく嬉しいんですよ。だから地域に住んでいる方に、何か若手職員がやってあげて、褒められるっていうですね、そういう経験を味わってもらう。

全く関係ない話ですけども、私は高校

の時に郵便局のアルバイトをやったんですけども、寒い日に荷物を持って行ったら、その家の人が「本当に大変ね、ごくろうさま」ってミカンを一つくれたんですね。これがとても感動的で、この仕事やっていて自分は役に立っている、人から感謝された、そんな気持ちを今でも覚えています。

若手の公民館職員が配属されてきた時、もし、ベテランの方が一緒に行ければ、街や地域と一緒に歩いてみたり、お年寄りの方がベンチに座っていたら、ちょっと声をかけてみて一緒に話をしてみたり、そのお年寄りの方が物を落としたら、若手職員が拾ってあげるように仕向けるとか、そうすると、「あら、ありがとうね」とお礼を言われる。そんな感謝される喜びが、その職員の方に何か一つの地域を考えるきっかけになるんじゃないかと言う気もするんですね。

私の知っている、地域でボランティアをやっている主に障がい者や高齢者の介護の活動をしている方が、「人の究極の喜びは、人の役に立つことだ」という事をしみじみとおっしゃっていますね。寝たきりの方でも何か役に立てることがある。それで役に立ったら、本当に嬉しい。

若い人の場合、人の役に立てたっていう実感を持てる経験が少ないと言われていきます。ですから地域の本当に特定の誰かの役に立って喜ばれたという、そういう経験を若い職員にどんどんさせてあげることによって、地域に興味を持ち、この地域の為に私は職員をやっているんだっていう感覚が持てるようになるっていうのが、理想論かも知れませんが、そういう事を目指していくのも大事だと思いました。

○司会

田中先生、本日は貴重なお話をありがと

うございました。我々職員にとってヒントになる非常に具体的なお話もありがとうございました。ただ今のお話を胸に、今後の新しい公民館活動、地域課題解決学習を作り出せるように努めて参りたいと思います。それでは、改めまして田中先生に感謝の意を表したいと思います。田中先生、本当にありがとうございました。

○講師

どうもありがとうございました。

第58回東京都公民館研究大会 第一課題別集会

公民館にとってのオンラインとは

事例報告者 1	荒川区地域文化スポーツ部生涯学習課社会教育主事	中泉理奈	氏
事例報告者 2	たま社会教育ネットワーク	石田智彦	氏
		鈴木孝志	氏
		萩元直樹	氏
助 言 者	千葉大学教育学部准教授	丹間康仁	氏

企画運営:町田市

「学ぶつなぐ活かすひろげる」オンラインを活用した事業づくり

～荒川区における社会教育実践報告～

事例報告者1：荒川区地域文化スポーツ部生涯学習課社会教育主事 中泉理奈 氏

先週から感染者数が増えて、今回はオンラインでお話させていただく形となります。こういった状況でもオンラインを活用することで学びの場が開かれることは、改めてよかったと思います。



中泉理奈 氏

荒川区の生涯学習推進計画では、「学ぶ、つなぐ、活かす、ひろげる」という4つの視点で「学びによる生涯活躍のまちあらかわの実現」を目指しています。

さて、今回の課題別集会では、公民館職員の役割として「つどう・まなぶ・むすぶ」をリアルで大切にしたい気持ちということで、どのようにオンラインに取り組むかを考えるにあたり、事例の一つとして荒川区でのオンラインの事業づくりについて実践報告をさせていただきます。

最初に荒川区について、簡単にご紹介いたします。東京都の北東部にあり、人口21万人、23区では2番目に面積が小さいで

す。都電（路面電車）も通っていて、交通の便が良く、平坦な土地で自転車での移動も便利だと区民の方はおっしゃっています。商店街や銭湯もあって声の掛け合いがみられる心地よい良い下町文化を感じられるまちです。

1 荒川コミュニティカレッジ(コミカレ)の紹介

2010年に開校した区直営の地域大学で、地域の担い手の育成が目的です。人や地域のつながりをつくっていく学びの場です。現在、11期生36名が学び、修了生が350名近くいます。まちづくりや地域交流をテーマに20回通年講座を開催しています。特徴としては座学だけではなく、まち歩きや体験活動などを取り入れており、年に一度学園祭も行っています。

2 コロナ禍での状況とオンライン実施にむけて

2020年3月から、事業やイベントが中止になり4月には施設の休館がありました。

私たちは、こういった時こそ人とつながる学びが大切で、学びをやめないようにするためにオンラインの活用ということを検討し、実施に向け動きました。

なぜ、学びを止めないことが大切である

と気づいたかということ、緊急事態宣言中に各団体に電話でヒアリングをしたところ、LINE や電話、手紙を活用し、活動を継続している団体がありました。また、コミカレという学びの場でのつながりがあって、コロナ禍も孤立しないで生活できているという話もありました。地域の声から、私たちはどうしたら学びの場を開くことができるか、またそこに参加してもらえるのか考えました。そして、コミカレに関わってくださった講師の皆さま、他の自治体職員などと情報交換をしました。長野県のシニア大学では、すでに Zoom（インターネット会議システム）を用いた講座を実施していたので、機材や実施方法など教えていただきました。社会教育指導員を中心に実施方法を検討し、9月にWebex（インターネット会議システム）で入学ガイダンスが出来て、その後、Zoom を導入して講座を開講することが出来ました。

3 オンラインの活用で気をつけたこと

オンラインを活用しての事業実施では、各事業の目的を確認することが大切だと考えます。必要に応じて微調整することもあります。学びの場が開かれることで地域の学びを通したつながりづくりをしていくことができます。オンラインの活用はこれまでの実施してきた対面講座の代替的な手法でもあります。内容によっては目的を果たせないものもあります。

コミカレのオンラインを活用した講座は Zoom と対面のハイブリット方式、YouTube での配信を行いました。例えば、オンライン上で講座後のグループワークの余韻の時間を工夫するため、講座終了後 30 分程度グループで続きが話せる部屋を開けておくなど、学習活動やつながりづくりを

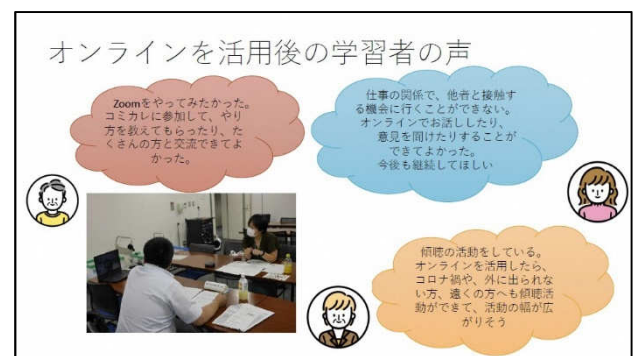
支援しています。

4 学習者の声

コミカレ受講生の声をご紹介します。

- Zoom をやってみたかった。Zoom で他の人と交流できてよかった。
- 仕事の関係で他者との接触が禁止されたが、オンラインがあり学習に参加できた。
- 自身の今後の活動の中でオンラインを活用してみたいと思う。

みなさん Zoom の使い方にも慣れてきて、次に学習者の想いやニーズをどのように学習や活動に取れることができるだろうと考えています。



5 学園祭

今年度は地域交流イベントの学園祭でもオンラインを中心に企画しました。

荒川区を知るためのクイズを区民の方と一緒に考え、番組のような形で Zoom 配信したり、会場と YouTubeLive のハイブリットで地域活動の事例から地域のつながりづくりを考える講座を実施しました。

学園祭は実行委員会形式で5月からコミカレ生と企画を進めていきましたが、9月頃にコロナの感染者数が多くなり、オンラインを中心に企画を考えることにしました。オンラインを活用することによって、その

場に来られなくてもまちづくりに参加できる、これからの活動を思ったださった方や、来年の実行委員会も参加したいとの意見もありました。

6 オンライン事業作りの課題

つながりづくりが目的の講座は、オンラインでは十二分につながりが出来にくい場合があります。オンラインでは自宅や、顔を見られたくない方への対応も出てきます。ただ、顔が見えない状況で話し合うのが難しいのでフォローが必要です。オンラインに慣れている年齢層や実施方法を工夫すると少しクリアできるのかなと実践の中で感じています。また、ネット環境が無い方への対応として会場に来ていただいて事務所のネット環境を使っただくといった学習環境へのフォローも必要だと思います。実施する際、職員のスキルの習得や機材の確保もオンライン事業を始める時の課題です。

7 最後に

オンラインを活用した学びの展望としては、代替的な役割として学びを止めない学習支援としての活用のほか、区民の学習機会の拡充、時間や場所にとらわれない学習機会を増やすことが出来ると思います。さらに、オンラインを活用することによって新たな参加者層へのアプローチの可能性もひろがります。

私たち学習支援者が改めて大切にしたいことは、地域の方や学習者の声を聴くことです。学びの場をつくる私たち自身が他者と一緒に学び、新しいことに挑戦することで、新たな学びの展開をつくっていくことができると思います。

オンラインを活用した学びの展望

・ 学びを止めない学習支援

- ⇒これまでの実施手法の代替的な役割
- ⇒コロナ禍での孤立化を防ぐ

・ 区民の学習機会の充実

- ⇒時間・場所に囚われない学びの機会を増やす
(区内団体や他自治体・大学等の事業や動画の紹介も合わせて実施)
- ⇒新たな参加者層へのアプローチ（現役世代など講座に参加しづらい層）

・ 地域活動・サークル活動のオンライン活用

- ⇒オンライン学習に参加することで、活動のオンライン活用など、活動の幅が広がる



社会教育アップデート2020

～学びを拡張する公民館～

事例報告者2 たま社会教育ネットワーク 石田智彦 氏
鈴木孝志 氏
萩元直樹 氏

1 たま社会教育ネットワークの紹介

第58回 東京都公民館研修大会 第1回課題別集会
「公民館にとってのオンラインとは」2022.1.26

社会教育アップデート2020 ～学びを拡張する公民館～



たま社会教育ネットワーク

井口啓太郎・石田智彦・伊藤隆志
鈴木孝志・萩元直樹・濱原幸恵



たま社会教育ネットワークのみなさん

石田さん

たま社会教育ネットワークを略して「たまいく」と呼んでいます。多摩地域の社会教

育活性化に向けて、自主研究会、情報換会を実施しているゆるいネットワークです。

このゆるいネットワークというのがポイントで代表者なども存在せず、フラットな緩やかな関係性の中で、自分が協力できるところは協力するというスタンスで各種の活動を行っております。具体的にはワークショップや情報交換、社会教育活動関係書籍への執筆活動なども行ってきました。大判『社会教育』では、不定期連載として社会教育の再設計を目的とした「Re:Design 社会教育」も担当しています。

2 オンラインで「もやたま」を開催

鈴木さん

たまいくで実施したオンラインの取組を紹介します。

これまでもたまいくでは、定期的に自主研究会「社会教育のモヤモヤを多摩のみんなで考えよう」を実施してきました。（以下「もやたま」という）。

もやたまでは、社会教育に携わる人の不安や悩みを語り合っていきます。「初めて公民館に配属されたけど、何をやっていいの

かわからない」「効果的なチラシの作り方は？」「そもそも社会教育って何だろう？」など、社会教育に関するもやもやを語り合うワークショップです。もやたまでは、対話を通じて得た自分自身の気づきや、出会いなどを大事にしています。

直近では令和2年3月に開催する予定だったのですが、新型コロナウイルスの影響で、急きょ中止にせざるを得なくなっていました。その時、我々の中にも「このまま単に中止するだけでいいのか」というモヤモヤがあり、ひとつチャレンジとして、このワークショップをオンラインでやってみようということになりました。

石田さん

このオンラインのワークショップに至るまでですが、まず、緊急事態宣言の中、今できることやオンラインの活用方法を LINE のグループトークで話し合いました。この頃は Zoom や Webex などのツールがまだ一般的ではありませんでした。

その後「社会教育アップデート 2020」として、Zoom でオンラインの難しさや、事業やイベントができない今何ができるかを話し合う座談会を開催したのですが、その様子を『社会教育』2020年7月号に漫画でだれでも分かりやすい表現にして連載しました。この頃は、新型コロナウイルスで先が見えずネガティブな話がとても多かったので、少しでもポジティブな気持ちを持ってもらいたいと、漫画でより多くの人に読んでいただけるよう心掛けました。

同9月号では「もやたまオンライン」の事例報告を行いました。

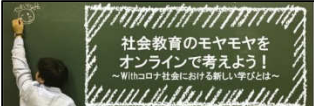
鈴木さん

もやたまのオンラインワークショップですが、目指したものはオンサイト開催と同じで、悩みや不安を語り合って自分自身の気づきを持ち帰ることです。オンラインでもオンサイトでも、主旨が変わっていないことがポイントです。

オンラインでの具体的な工夫としては、名札の代わりに所属を画面表示させることや、アイスブレイクもやりました。オンサイトとは異なる方法でしたが、オンラインでの対話をスムーズに進めるために、必要なことだと思いました。少人数のグループに分かれるブレイクアウトルーム機能も活用し、対話のワークも行いました。

またワークショップ中チャットファシリテーターを置き、チャットが盛り上がるような工夫も行いました。

一度は開催をあきらめましたが、オンライン上でも、同じようにワークショップを開催できるということを、実感したのを覚えています。なにより、オンラインで実施して良かったことは、全国の皆さんとつながることができたという事です。たまいくとしても、オンラインの新しい可能性を感じたワークショップでした。

 ■2020年6月28日(日)10:00～12:30 Zoom ■参加者: 全国各地から21名(ゲスト含む) ■コンテンツ: アイスブレイク・ゲストトーク・対話ワークなど	
もやたまオンラインが 目指したもの コロナ禍における社会教育現場の工夫や実践、 悩みを共有し、各人が気づきを持ち帰り、 明日へのモチベーションとすること =リアル開催と変わらぬ趣旨	ポイント! これまでリアルで 行ってきたことを オンライン上でも実施 + オンラインならではの工夫

3 オンラインの役割について

荻元さん

2000年代のパソコン講座の初期をふりかえりたいと思います。全国的にパソコンが支給され、公民館を中心にパソコン講座が開催されてきた経過があります。

当時より2010年代に至るまでパソコン講座は個人の生活課題かつ要求課題に特化した内容が多く、パソコン講座担当の多くの方が、パソコンを目的にしている状態でした。

そこで、私は、パソコン講座から、発達課題、地域課題、現代的課題に分類されるような必要課題に取り組みました。事例としては、パソコンでふるさと冊子の作成やサークル情報冊子を作成する講座から地域のつながりを構築し、取材活動の中で見つけた課題に対処するサークルもいくつか生まれました。また、パソコン講座を通して「学びの循環」も大事にしました。パソコン講習会から生まれたサークルがパソコン講座の学習支援者を務めたり、フォトムービーの作り方を学んだ受講生が講座内で一般向けの上映会&対話を実施しました。

講座は今後の学習活動の助走期間です。パソコン講座でパソコン操作を教わるというインプットから、パソコンを活用したアウトカムまで目指して講座を実施しました。

パソコン講座発祥の約20年後、今必要とされているオンラインの活用は課題解決の手段であって、オンライン活動自体を目的としないように。他の講座と同じで「どのような課題を解決していくか」を起点に考えることが大切だと思います。

4 オンライン活用で広がる公民館活動

荻元さん

公民館活動とは、公民館職員の講座、サー

クル活動、協働活動の3本柱です。公民館活動にオンラインを活用するメリットとして一番大事なことは、「いつでもどこでもだれでも学ぶことができる」生涯学習社会の実現に寄与できることです。特に「だれでも」が難しいことでしたが、オンラインを活用することによって参加のハードルを下げるができます。「コロナだからオンライン」ということではなくて、生涯学習社会を実現するためにはオンサイトとオンラインを併用していくことは大事だと思います。

次に、サークル活動の支援ですが、地域の方からしっかり聞き取ったうえで、学習支援業務の一環としてオンライン活用を提案・支援することが大事だと思います。

そして、協働活動ですが、今まで続けていたイベント等を単純に中止するのではなく、オンライン活用を手段に含めた上でどのように継続できるか、新たなかたちを考えることが大事だと思います。

鈴木さん

最後に、ウィズコロナの時代におけるオンラインの学びを拡張する公民館ということで、3つの視点からまとめていきたいと思います。

（1）これまで公民館に来ることができなかった人の視点です。例えば障害のある方の中には、行きたくてもなかなか公民館に足を運べなかった方々がいます。そのような方々も、オンラインであれば参加することができたり、アーカイブの映像を視聴して、講座などに参加することもできるかもしれません。

（2）しかし、どうしてもオンラインから抜け落ちてしまう方もいます。「このコロナ禍で今まで通っていた公民館へ行けなくなり、長く続けてこられたサークルを解散

しようかと思っている」というような声もよく聞きます。公民館は、その方々を見捨ててしまうのではなく、いかに寄り添って支援していくか、すべての地域住民に学びを届け続けるためにはどうすればよいのか、改めて考えていく必要があります。

（3）そして最後に、オンラインを用いた学びや学習方法を含め、公民館活動をアップデートしていくことです。

オンラインの良いところを今まで話してきましたが、やはりオンラインでは再現できないオンサイトの良さがあることも事実です。

例えば、講座を受けている際、隣の席の人と、ちょっと感想を話し合うことは、Zoomではなかなかできません。でも、社会教育においてはそういう一言がとても重要な気づ

きを生んだりもします。そのような、これまで実際の現場で大事にしていたことを改めてふりかえりながら、公民館、そして社会教育が、学びや活動方法をアップデートしていくことが大事だと思います。

最後にたまいくから、「新たなステージへ、社会教育をアップデートしよう」というメッセージをお伝えしてお話を終えたいと思います。ありがとうございました。

〈まとめ〉
ウィズコロナでオンラインの
学びを「拡張」する公民館



3つの軸

①
これまで公民館に
来れなかった人を
巻き込んでいく

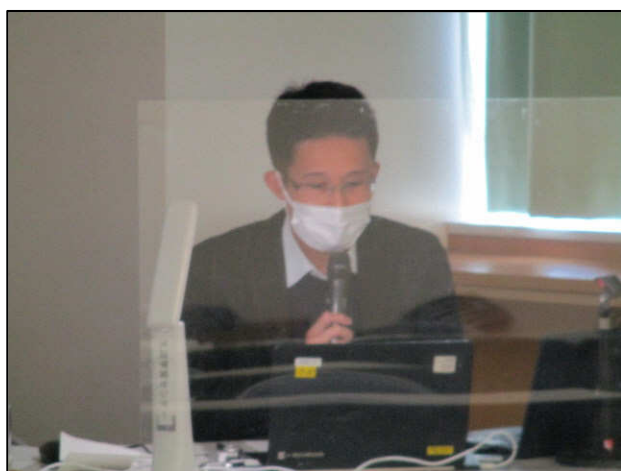
②
オンラインから
抜け落ちてしまう人たち
に寄り添っていく

③
オンラインによって
学びや活動方法を
アップデートしていく

公民館にとってのオンラインとは

助言者：千葉大学教育学部准教授 丹間康仁 氏

前半二つの事例発表を受けとめ、「公民館にとってのオンラインとは」というテーマを皆さんと考えていきましょう。



助言者 丹間康仁氏

1 そもそもオンラインって？

コロナ禍で多くの新しい言葉を使うようになりました。今まで知らなかった感染症関連の言葉はもちろん、社会の大きな変化として、「オンライン」という言葉をよく耳にするようになりました。オンラインは、線（line）につながっている（on）状態です。公民館なら、この線は人と人とのつながり、市民と公民館のつながりです。公民館にとってのオンラインを考えると、地域の中で公民館が結んでいく市民のつながりというテーマに行き着きます。

2 何のためのオンラインか？

今、公民館の現場によって Wi-Fi 環境が徐々に整ってきたケースも耳にします。一方、施設利用も再開し、直接来館できる方々が少しずつ戻ってきました。そんな中、「オンラインといわれても、何を企画したらよいのだろう？」「オンラインで何かしなくてはいけないの？」など、オンラインとどのように付き合うべきか、なかなか展望を描きにくいと思います。機材や回線も必要で、得意な職員も苦手な職員もいます。オンラインのスキルを学ぶモチベーションも、「何のためのオンラインなのか」という目的がはっきりしなければ、高まらないでしょう。

前半でご報告いただいた事例は、その目的が明確でした。それは、「学びを止めない」「学びを届ける」「学びを仕掛け続ける」こと。コロナ禍で社会教育の現場に大きな制約や制限が生じた中でも、市民の学びを支え続けたいという明確な目的があったことです。その目的を実現する手段としてオンラインを使った点が何よりも大切です。

来年度に向けて事業計画を練る今の時期、「オンラインもやってみよう」という話が出るかもしれません。しかし、何のためにオンラインを使うのでしょうか。単なる感染防止対策としてではなく、オンラインを用いた先に何が達成できるのかを見定めることが大切です。

私は現在、コロナ禍の公民館の運営状況について全国調査を進めています。多くの市の公民館でオンライン講座が実施されています。しかし、その理由を尋ねると、もちろん「学びを止めないため」という目的が明確な例もありましたが、一方で、周りからオンラインを勧められてだとか、感染症拡大防止のためにといった回答もありました。市民の主体的な学びを生み出す公民館が、受け身の姿勢でオンラインを取り入れても、市民に思いは届きません。やはり手段と目的が入れ替わってはいけません。オンラインを使って何を実現したいのか。目的の本質を大切にする必要があることは、前半のご報告からも、全国調査からもはっきりと見えてきています。

そこで、四つの観点から具体的に考えてみましょう。

一つ目は、生涯学習社会の理念である「いつでも、どこでも、だれでも学べる」です。オンラインを用いることで、「いつ」に、「どこ」に、そして「だれ」に学びを届けようとするのか。あるいは学びを仕掛けるのか。公民館がオンラインを用いる際は、3つの項目をそれぞれ明確にする必要があります。

二つ目は、社会教育の基本です。人々の自由で主体的な学習の条件整備や環境醸成こそが社会教育の重要な役割です。オンラインを用いた事業を行う際、市民が学ぶための条件を本当に整えられているかを考えてみれば、「公民館がオンラインで講座を配信しました」というだけでは、決して社会教育を実現したとはいえません。Zoom や YouTube を視聴できるようになるための入門講座を実施したり、必要に応じて参加者のオンライン使用を個別にサポートしたりして、市民がオンラインを自分自身で扱

えるようになっているかを考え、オンラインでの学びの基盤を支えていくことも大事だと考えます。

三つ目は公民館の目的についてです。社会教育法第20条に示された公民館の対象区域、すなわち公民館にとっての「市町村その他一定区域」を、オンラインはどのように変えていくのでしょうか。例えば YouTube 等で公民館の講座を一般公開すれば、対象区域外の人も視聴して学べます。しかしそれだけでは、対象区域の方々の生活を豊かにしているとはいえません。公民館である以上、オンラインに関してもその市町村や地域の住民のための事業となっているかが問われます。公民館の目的に立ち返れば、ユーザーの真似事をするだけでは、方向性としてどうやら正しくなさそうだと。しかしオンラインがあれば、その地域と他の地域をつなぐこともできます。オンラインを使って、その地域に閉じこもらず、遠く離れた地域ともつながり、ネットワークを広げられるかもしれない。コロナ禍で渡航自粛勧告が出ていても、海外、世界とつながれる。今は別の地域で暮らしている出身者の方とつながりを築いて、ふるさとを感じてもらえるかもしれない。その地域の人々の生活を豊かにするために、その地域発のつながりを広げたり深めたりしていく事業ができれば、それこそ公民館の目的を実現する方向に大きく進めます。公民館の対象とする地域の捉え方自体を、ローカルからグローバルへ、それをグローバルと呼ぶ人もいますが、アップデートできます。

四つ目は、居場所としての公民館です。これまで公民館には、自宅（第一の場）でもなければ職場や学校（第二の場）でもない、「サードプレイス」（第三の場）としての役割がありました。コロナ禍で政府からステイホ

ームが求められた時期、リモートワークや学校の全国一斉休業、公民館の長期臨時休館によって、第二の場はもちろん、この第三の場に出掛けられない事態が起きました。そんな中、オンラインは学びを止めない手段として注目されましたが、ステイホームが不要になった際は、自宅で学ぶ公民館のあり方を考えることもテーマになります。公民館を第三の場や居場所として捉えれば、家族や子どもから離れて、一人の人間として学ぶことが大切な局面もあります。公民館では、子どもや家族から離れて学ぶ時間を生み出すうえで、例えば保育事業が重要な役割を持ってきました。自宅では育児や介護が続いて、公民館への参加を時間的、空間的にうまく切り分けられない方もいる。そうすると、例えば親子や三世代で参加できるような童歌やむかし遊びの事業など、家族みんなで自宅でも一緒に学べる内容はオンラインにも適しますが、一方で、家族とは離れて集中して学びたい内容の事業もある。家族と離れることで、新たな仲間と出会えることもあります。事業の目的や対象者に合わせて、オンラインと対面の使い分けを適切に整理して行う必要があります。

3 公民館にとってのコロナ禍

少し気が早いですが、何年か後に、このコロナ禍という時代をふり返る時が来ます。その時、単に「辛かった」「大変だった」に留まらず、「公民館の未来を考え抜いて切り拓くうえで大切な時期であった」「意味がある時期だった」と捉えることができれば救われます。

戦後、日本の公民館の歴史において、コロナ禍はどのように位置づくでしょうか。これは、各自治体あるいは各公民館が、コロナ禍とその時代を生きる市民にどう向き合っ

てきたかという問いでもあります。まだ活動を再開できていない学習団体もあります。そういった方々に、今、職員としてどのように向き合っているのでしょうか。そして、コロナ禍だからこそ浮かび上がった公民館の存在意義とは何でしょうか。公民館とは何かを考える大切な時期です。ぜひ前半でご発表いただいた方にもご発言をお願いします。

4 討議1：コロナ禍で見た公民館の存在意義とは？

石田：オンラインをすることによって、人と人が会う大切さに気付けた。これまでの存在意義が否定されるわけではなく、本質的な大切さが改めて浮き彫りになったのではないか。



中泉：コロナ禍で、多様な過ごし方や働き方が現れて、そういった皆さんと、どう「つどう」か、「つながれる」かが大切だと思う。公民館があることによって、そこに行ったら誰それがいるといった地域の安心感とつながりが大切。

丹間：コロナ禍で私が実施した日野市中央公民館の利用団体調査では、公民館は「仲間と集まれる場」「かけがえのない存在」「だれもが互いに寄り添う場所」であるとの回

答が寄せられました。公民館の役割を再認識した声です。コロナ禍での利用者の気づきは、今後の事業企画の際、大きなヒントになります。そして、将来的に感染防止対策のための制限が解かれる時、オンラインの活用方法を一層考えなければならない。その時までには、オンラインが対面の単なる代替手段ではなく、公民館にとって、その未来を切り拓くための手段となっていけるかが問われています。

5 討議2:コロナ禍でのオンラインの役割から、今後をどう考えていくか？

学校教育の現場ではICT教育が推進されています。子どもたちは学校の教室の机で、一人一台のタブレット端末を使っています。一方、公民館はようやくWi-Fi設置やオンライン会議システムのライセンス取得、カメラやマイクの導入を始めつつある段階です。学校と地域の連携・協働が求められる中、未来の市民を育てていく学校と、魅力的な大人が生活している地域を、公民館がオンラインを介してつないでいく役割を担っていけるかもしれません。それには、学校教育と社会教育の双方でICT化を進めていくことが求められます。

また現在、高齢者の方々の中には、オンラインを使えない方もいます。調査でもコロナが収束すればオンラインは使わないという利用者の声もありました。それも実態として踏まえつつ、オンラインの可能性として、今まで公民館を使ってこなかった未利用者や未利用層に視野を広げることが期待されます。これには若者や働く世代へのアプローチも含まれます。先ほどご紹介した日野市での調査では、公民館の長期臨時休館と施設利用再開の後、オンラインを継続して使っている団体はわずか1割でした。しかし、使っていない団体の中には、自分達

にオンラインのスキルがないため、公民館が臨時休館したことで場所を失い活動できなかったことを悔やむ声もありました。そうした方々のスキルの習得を支えていくことも大切です。そうすると、職員の方々がオンラインを使いこなせるのも良いことですが、それ以上に、今はまだオンラインに慣れていない市民の方々が、今後どんな時でも学びを止めずに続けられるよう、オンラインを使いこなせるようになるサポートこそ重要です。オンラインであれ対面であれ、公民館の主役は市民です。

6 まとめ

最後に、「いつでも、どこでも、だれでも学べる」という生涯学習社会の理念と、公民館が紡ぐ「つながり」を考えます。市民同士をつなぐ、市民と公民館をつなぐ、公民館同士をつなぐ、公民館と他の機関をつなぐ。さまざまなライン＝線があります。「いま」という同じ時間軸で公民館と他の公民館をつなぐ事業も生まれています。また、地域の魅力を取材し、アーカイブとしてYouTubeで配信して、「いま」の地域を「未来」の地域につなぐためにオンラインを使っている公民館もあります。

いずれにしても、公民館にとってオンラインはあくまでも有力な手段の一つ。公民館の目的は、どんな時でも、市民の居場所として第三の場として、学びを届ける、学びを仕掛けるということが基本です。その魂を大切にしながら公民館がオンラインを意識することで、コロナ禍を乗り越えた先の公民館が、より強靱に発展していくことを願っています。

意見交換

チャット：オンライン上でのコミュニティづくりも大切であると思います。公民館の存在意義として、すべての市民が学びの機会を享受できなければいけないということに、改めて気づきました。

丹間：コロナ禍では、オンラインが注目されたからこそ、対面の大切さも見えてきました。公民館に集う人が、時にオンラインも使って新しい世界につながっていく。既存のコミュニティに風穴を空ける可能性があります。公民館の「集う」「学ぶ」とともに、「結ぶ」の場面でも、オンラインとオンサイトの組み合わせが新たな「つながり」と地域の姿を生み出すかもしれません。



第58回東京都公民館研究大会 第二課題別集会

社会教育士の役割

～いま、公民館に求められていること～

文教大学人間科学部准教授 青山鉄兵 氏

企画運営：小平市

社会教育士の役割

～いま、公民館に求められていること～

文教大学人間科学部准教授 青山鉄兵 氏

1 はじめに

小平市では当初、会場参加型とオンライン参加型（YouTube 配信）の併用で、準備を進めてきましたが、新型コロナウイルスの感染拡大に配慮して、オンライン会議システム Zoom に切り替えて、開催しました。また、助言者、参加者、事務局を含めて、オンライン上での課題別集会になり、Zoom のチャット欄や、オンラインツール「スグキク」を活用して、質疑応答等の取り組みも行いました。（事務局より）



web カメラ等の機材の様子
（令和4年1月28日小平市中央公民館）

2 社会教育士について考える前に ～「社会教育らしさ」をめぐって～

今回は「いま、公民館に求められていること」をテーマに「社会教育士」と公民館とのつながりを考えていきます。公民館と社会教育士は直接つながるものではありません

が、はじめに前提となる「社会教育らしさ」について考えた上で、社会教育士がどのようなものかを確認し、公民館と社会教育士の関係について考えたいと思います。

(1) 社会教育の定義と社会教育らしさ

社会教育は、教育が行われる場によって定義されます。教育が行われる場を、家庭、学校、その他に分けた時、家庭と学校以外の場で行われる教育が社会教育です。ただ、これは「～じゃない方」という定義ですから、社会教育がどのような特徴を持つかは分かりません。そのため、学校以外の場で行われることがどのような「社会教育らしさ」につながっているのかを考える必要があります。

(2) 社会教育における「教育」と「学習」を捉える視点

「学習」は一般的に、①教えられた結果として生じるもの、②学習者が意図的に行うもの、③他の行為から独立した活動、④よいことである、といったイメージで語られがちです。しかし、社会教育・公民館では、これらに当てはまらない学習がたくさん見られます。社会教育を考える上では、「学習」も「教育」も幅広く捉えておく必要があります。

また、社会教育の分野では、①学習者が

自発的であること、②学習者同士が相互的に学ぶこと、③学ぶ内容や方法の多様性が担保されていること、④学習が学習以外の要素と関連していること、などが重視され、住民が地域の社会教育の在り方を決めるプロセスに参加することが大切にされてきました。こうした中で、多様な支援者の専門的な資質や能力をどう捉え、養成するのかが重要な論点だったわけです。

(3)「社会教育らしさ」を可視化することの意味

社会教育主事の資格には、主事の配置率が低下していることに加え、発令されなければ名刺に書けないという問題などもあり、社会教育に関する職員の専門性を可視化することが課題とされてきました。専門性を可視化することで、地域づくりをはじめとする社会教育以外の分野でもこうした専門性を生かせるようになることも期待されます。

3 社会教育士制度の意義と課題

(1)「社会教育士」制度の概要

2020年4月以降の新しいカリキュラムで社会教育主事の有資格者になった方に「社会教育士」の称号が付与されることになりました。旧カリキュラムで取得された場合は、新たに追加された2科目を履修することで社会教育士の称号が得られます。称号ですので、発令されていなくても名刺に書くことができます。

新カリキュラムでは「支援」と「経営」が重視されており、支援ではファシリテーション、経営の中では評価・マネジメントが強調されています。

(2) 社会教育全体の基礎的・汎用的な資格として

社会教育士は、従来の社会教育主事の資格を、社会教育に関する基礎的・汎用的な専門性を示すものとして活用しようとするものと言えます。公民館職員や公民館運営審議会委員、社会教育的な役割を果たしている方々が、社会教育に関する資質・能力を身に付けるための仕組みとして考えることもできます。また、他の分野の資格と組み合わせることもしやすくなります。制度改正以降、社会教育主事講習の受講者が増えているようです。

反面、①立場ごとに求められる専門性は違う可能性があること、②「経営」や「支援」などが社会教育主事の役割と言えるかということ、③必置である社会教育主事の発令がされにくくならないかということ、④社会教育が地域づくりに従属してしまわないかということなどが危惧されることもあります。

4 社会教育士 × 公民館の可能性

(1) 社会教育士の使いみち

公民館職員にとっては、自分の担う役割や専門性を示すものと言えます。また、社会福祉協議会、学校、児童館など、他の施設や機関・団体と連携するためのきっかけとしても役立ちます。

(2) 公民館×社会教育士が担う地域づくりを考える

地域づくりは社会教育の伝統でもありますが、バブル期以降の個人的、消費的な生涯学習への反省や、「地域の教育力」や子育て支援への関心の高まり、人口減少への対応、社会教育行政自体の基盤の弱体化、などの中で改めて地域づくりが強

調されるようになりました。

さまざまな分野で地域づくりが進められる中で、社会教育にこそできる地域づくりとは何かを考える必要があります。地域のキーパーソンの育成や学習を通じた地域課題の解決、ボランティア活動と学習活動の循環、学習を通じた人々のつながり、住民自治の実現などが、特に社会教育・公民館で大事にされてきました。学びを通じた地域づくりと地域づくりを通じた学びの循環ということもできます。

公民館は幕の内弁当のようなところがあり、1つ1つの機能は必ずしも専門的ではありません。むしろ地域や学習支援に関わる様々な機能が1つの施設の中にあることが強みだと言えます。公民館を拠点に、様々な機関とつながる連携の核としての役割が重要になります。また、公民館を常連客のためだけの施設にしない

ことも大切です。社会教育士の仕組みが、社会教育・公民館がネットワークの中心として多くの人に開かれていくきっかけになることが期待されます。

感想等

- 社会教育を平素と違う角度から考えることが出来た。
- 30年公民館に関わってきた結果の切り口とは全く違う新しい切り口でとても斬新な感じで、今後私たちも考えなければいけないのかと考えさせられた。
- 社会教育士の称号を取得し、公民館職員として業務に当たっているが、正直持て余しているような感覚です。
- 社会教育士を語るポッドキャストとかがあれば良いと思う。

1 課題別集会の動画

<https://youtu.be/BehJVGizN9c>



2 配布資料

<https://bit.ly/3orIUhy>



3 アンケート集計結果

【Google フォーム】

<https://bit.ly/3gp1Acz>



4 アンケート集計結果

【PDF】

<https://bit.ly/3uBJJ9>



Zoom を利用してオンライン開催
（令和 4 年 1 月 28 日 小平市中央公民館）

第58回東京都公民館研究大会 第三課題別集会

公民館における 社会教育実習のあり方について ～大学・公民館・実習生 三者の視点から捉える社会教育実習～

事例報告者1	町田市教育委員会生涯学習センター公民館職員	岩田武	氏
事例報告者2	立教大学文学部文学科3年	岩見郁菜子	氏
助言者	東京学芸大学教育学部准教授	倉持伸江	氏

企画運営：東京都公民館連絡協議会 職員部会

町田市公民館

障がい者青年学級での社会教育実習生受入れの実践報告

事例報告者1：町田市教育委員会生涯学習センター公民館職員 岩田武 氏

1 町田市公民館障がい者青年学級

45 年以上続く町田市公民館障がい者青年学級は、現在、学級生約 160 人、担当者と呼ばれる有償ボランティアスタッフ 43 人、各学級に担当職員 2 人。



土曜や日曜に行われる3学級に分かれて、学級生は、自分の興味のあるコース(音楽・スポーツ・演劇・料理・工作等)を選び、希望別に 10 名程の集団を構成し、1 年間活動を共にします。担当者と呼ばれる有償ボランティアスタッフも同様に 1 年間同じコースで活動します。

開設当初から集団づくりによる「生きる力・働く力の獲得」という目標を掲げ、「自治」「生活づくり」「文化の創造」という 3 つの柱を軸に活動しています。

学級活動は 1 日単位(10 時～16 時)で月 2 回。終了後の 16 時～17 時に各コース

の班長が集まり、学級全体に関わる活動について話し合い決定する班長会を行うことが特徴です。集団決定による「自治」を大切にしています。16 時～18 時に茶話会も行っています。午前と午後のコース活動では、学級生の様々な思いを込めた創作活動が行われます。オリジナルソングに代表される「文化の創造」に取り組んでいます。

学級活動日とは別に、木曜 19 時～21 時に、ボランティアスタッフによる担当者会議も行います。担当者会議や学級活動は、ボランティアスタッフの学びの場にもなっています。これは、後述の社会教育実習生受入れでも、とても大きな意義を持つ取組となっています。

担当者と呼ばれるボランティアスタッフは、学級活動を支援し共に活動する人で、参加資格は 18 歳以上です。学級日の運営だけでなく、担当者会議や総括会議への参加・学級ニュースの作成・実践報告集の編集作業等も活動に含まれています。継続して関わっていただくことを前提に、報償費を予算化しています。活動日 1 日五千元、夜間会議 1 回二千元。10 代の学生(教育学部・福祉学部)から現役社会人(会社員・主婦・福祉施設職員等)、退職した方まで、幅広く在籍しています。

担当者(ボランティアスタッフ)と学級生

は「教える・教わる関係」ではなく、互いに学び合う「フラットな関係」。青年学級は、学級生だけでなく、ボランティアスタッフも学んで成長していく場所となっており、「学びの二重構造」となっていることが特徴です。

実際に昨年度の担当者から、「青年学級の活動を通して多くの刺激をいただいたことで自分自身にも変化が見られました。この場所だったら大丈夫と少しだけ自分自身の行動や考えに対して積極的になれました。自分の想いを素直に、考えすぎずに伝えればよいのだと気づくことができました。」という感想が寄せられました。

2 町田市公民館での社会教育実習生の受入れ

大学で学んだことを実地で体験する場として、障がい者青年学級では40年以上前から社会教育実習生を受入れており、青年学級担当職員が社会教育実習生受入れ担当をします。

【町田市公民館社会教育実習生受入れの流れ】

<面談>

- ①実習で取り組みたいことの意向確認
- ②主催事業の紹介
- ③企画・実施・振返りができる事業を勧める
 - ・実習生には、特に「障がい者青年学級」を勧めています。最近は「大人のまなびテラス(夜間中学)」も勧めており、青年学級に追加して実習とする人もいます。
 - ・実習生は、他の主催講座では受付を担当する程度のお客様になってしまいますが、障がい者青年学級では、企画や振返りを話し合う担当者会議があり、わからないことがあれば、担当職員だけでなくボラ

ンティアスタッフにも気軽に聞いたり相談したりすることができると伝えていきます。

- ・障がい者青年学級は、1回1日約10時間、3回で約30時間となり、ほぼ実習必要履修時間を満たせることも伝えていきます。

④本人が、履修時間を満たせるよう主催事業を組み合わせ実習内容を決める

- ・ほとんどの実習生が、障がい者青年学級を選んでいきます。

<実習>

●障がい者青年学級

- ・担当者会議(企画)→青年学級(実施)→担当者会議(振返り)を1セットとして、3回(約1カ月半)体験します。
- ・実習で障がい者青年学級に関わると、毎年一定数が実習終了後も有償ボランティアスタッフ(＝担当者1回1日五千元、夜間会議1回二千元)として続けます。令和3年度は実習生5人中4人が引き続き担当者として関わっています。

3 障がい者青年学級で受入れた実習生の感想

青年学級に寄せて(昨年度コロナ禍での障がい者青年学級で受入れた社会教育実習生Aさんの感想)

私は青年学級で社会教育実習をさせていただいたことをきっかけに、その後、公民館学級の担当者(有償ボランティアスタッフ)となりました。不安もたくさんありましたが、多くの方に支えられ一歩ずつ成長できていると感じます。改めて感謝申し上げます。そして、青年たちが生き生きと活動している姿は私に様々なものをもたらしました。青年たちには大切にしているものがたく

さんあります。家族・仲間・言葉・うた・日常・そして青年学級等、たくさんの大切なものを日々抱きしめて生きています。私が忘れてしまっていたものを青年たちから思い出させてもらいました。

うたも作品もただ作って終わりではなく、伝えたい気持ち・作った時間・生きた証・たくさんの想いを乗せて、いつまでも大切にしている姿がとても印象的です。

私も、自分の想い・やりたいこと・好きなことを大切に生きていきたいと思いました。大切なものが壊されそうになった時に怒ったり行動したりできる自分でありたいです。諦めて投げ出して一歩引いてしまっただけは何も変わらないと考え直すことができました。大切なものを守り抜くために声を上げ続ける人の力にもなりたいです。

そして、人と人との繋がりや暖かさを改めて実感しました。幸せも悲しみも分け合える仲間がいること、集まる居場所が存在することが、どれほど大きな力を生むのかを肌で感じました。

コロナ禍での活動はたくさんの困難と課題をもたらしましたが、青年学級の力を実感しました。まだまだ成長途中で自分に自信の無い私ですが、皆さんからたくさん学んでいきたいです。この出会いに感謝し、皆さんと強く生きていきます。

町田市公民館

障がい者青年学級での社会教育実習を終えて

事例報告者2：立教大学文学部文学科3年 岩見郁菜子 氏

1 社会教育実習の実習先の検討

立教大学では、大学からの実習先指定はなく、学生自身が社会教育実習の申し込みを行います。

私は、町田市出身のため、町田市の施設や近隣自治体などを調べて検討した結果、町田市生涯学習センターの公民館を実習先を選びました。決め手は、まず、自分が既に町田市でボランティア活動をし、特に子ども向けの企画や社会教育に携わる事が多い中、障がいのある方や成人向けの社会教育に携わった経験が少なかったもので、そこに関わってみたいと思ったことです。生涯教育は、子どもから大人までの全世代が対象で、連綿とした継続があり、かつ多様な学びがあることから、子どもだけではなく、あらゆる世代の社会教育についても深く知りたい、「町田市ではどんな事を行っているのか知りたい」という気持ちが湧きました。

また、私には障がいのある伯父がいます。過去、伯父とは住んでいる場所が違ったため、会う機会も少なかったのですが、ある事をきっかけに伯父と同居することとなりました。しかし、伯父への接し方が分からなかったもので、実習を通して障がいのある方との接し方を体験したいという思いも、選んだ理由の一つです。

2 社会教育実習内容の選択

町田市公民館での社会教育実習は、面談時に案内された主催事業の中から、自分で必要履修時間分を実習として選択する方式になっています。私は、担当者会議があり企画・実施運営・振返りに携われることから、障がい者青年学級をメインに、大人のまなびテラス(夜間中学)もプラスして選択し、実習内容としました。

3 障がい者青年学級等での社会教育実習で感じたこと

実習では、障がい者青年学級の担当者会議や学級開催日への参加、その他、大人のまなびテラス(夜間中学)や、都公連職員部会等への出席もありました。

実習を通して感じたことは、青年学級がみんなの居場所として機能していることです。学級生は、何十年も前の話をつい昨日の出来事のように話しています。そのような会話に私は衝撃を受けました。コロナ禍で思うように活動ができていなかった経緯もあり、久しぶりに学級活動を開催した際は、学級生も担当者も「久しぶり！逢えて嬉しい！」などと声を掛け合っている様子から、この障がい者青年学級が、息抜きの場所であり、大切な場所であり、自分が自分で居ら

れる場所であることを印象的に感じました。

青年学級に関わって行く中で、学級生は障がいのあるなしに関わらず成人した一人の大人であり、私に学びを与えてくれました。私は以前、障がいのある方は意思疎通が難しい方と思っていましたが、この実習で「障がいがあるからできない」などの、自分の思い込みの視点を気付かされ、実習を通して日常生活の中で意識して変えていきたいとの変化が起きました。

また、実習では、一つの場所を中心に深く関わることも大切ですが、実習を受ける側としては、他職種や他分野との関わり等に触れてみることから得られる経験も大きいと思います。そのため、青年学級がメインの実習でしたが、都公連職員部会など様々な場を与えていただいたことも大きな経験となりました。

学校に戻り友人と互いの実習経験談を話す際も、私が実習した内容は、体験や事務・他団体との交わりなど多岐に渡っており、充実したものだと感じました。

みながらトライしていくことです。

核となる一人を中心に回す場ではなく、誰もが気兼ねなく意見を出せる雰囲気や、全員が中心になり全員が主体的に考えていく雰囲気を大切にしたいと思います。

先日、立教大学新入生歓迎会のスタッフリーダーに立候補しました。この社会教育実習がなかったらおそらく立候補などしていないと思います。

自分の学びが多い社会教育実習でした。



4 実習後の関わりの継続と変化

町田市生涯学習センター青年学級とは、実習後も関わりを持っています。

私にとって、今まで関わったことのない人たちとの交流は非常に有意義なものでした。関わりあうことの無かった人たちと実習を通して関わりあうことで、自分に無かったものや、考え方への気付きを得られて、青年・担当者(有償ボランティアスタッフ)・職員、全員が垣根なく学ぶ場という共有感や一体性を感じられる実習でした。

今後の抱負は、今までの青年学級の活動に加え、青年の方たちのやりたいことを実現し、青年の方たちはどのように考え、感じているのかを読み取って、私も全力で楽し

質疑応答

質問 1

実習を受ける前に期待していたことと、実習後の結果が期待どおりであったか少し違ったかを伺えますか。

回答 1：実習生(岩見さん)

受講前、青年学級を勧められました。担当者会議から携わらせてもらえることは期待が大きかったです。また、成人向けの教育にも携わらせてほしい旨相談し、学びテラスや市民大学にも参加しました。

しかし、成人向け教育は、コロナ禍で学ぶ側の参加者が少なかったことや、できたことが受付事務などだったため、もう少し深く踏み込んだ内容の業務に携わりたかったです。

質問2

に感銘を受けました。

実習後も活動が続いているようですが、継続している理由は何ですか。

回答2：実習生(岩見さん)

「居場所」であることが衝撃的で大きかったことと、青年の方と関わる中で「障がいのあるなしではない。」と気付くことができたことです。

「身構える必要はない」と気付けたことも大きいです。今では、伯父との関係性も良好になり、自分の性格にも変化が現れたのが実感できました。

質問3

実習生のうち5人中4人も継続している理由は何故だと思いますか。また、職員側の仕掛けや投げ掛けなどの意識されている部分は何ですか。

回答3：町田市(岩田さん)

明確な理由は思いつきませんが、面談の際、実習候補者に「本気で受けるならば職員側も本気でやります。軽い気持ちならば職員側も力を抜きます。」と伝えています。

本気の意味疎通を繰り返す中で、お互いの気持ちが繋がる工夫をしました。職員の対応次第でもあると思います。

仕掛けや工夫としては、青年学級事業に関わることが実習生にとって一番良い実習ではないかと伝えています。

質問4

青年学級活動をされて、印象に残ったことや活動など教えてください。

回答4：実習生(岩見さん)

音楽コースに関わり、オリジナルの学級ソングがあり、歌った曲について思い出などを聞く機会がありました。堂々と話している姿が衝撃的で、曲への想いがあること

公民館における社会教育実習のあり方について

助言者：東京学芸大学教育学部准教授 倉持伸江 氏

1 社会教育士制度導入に伴う変化

社会教育実習は、従前社会教育主事資格に必要な単位として選択制でしたが、2020年(令和2年)4月から、社会教育主事の養成課程の規定が一部改正され「社会教育士」という称号が作られ、社会教育実習が必修化しました。



これまで社会教育主事資格は「取ってもほぼ使えない」と言われた資格でしたが、実際に社会教育の学びは活用し甲斐があることは経験的には語られてきました。そのため、社会教育主事に必要な科目を取った人に、教育委員会事務局で働かなくても、様々な分野・立場・職業で学びを支援する専門性を活用してもらうため、新たに社会教育士が制度化されました。

仕組みを変えた際に、時代に合わせ資格の中身や専門性も見直されました。そのキーワードの一つが「実践力」です。実際の人々の学びを支える具体的な力が求められ

るようになりました。特に大学の養成課程は経験の少ない若者の受講が前提のため、養成課程だけではその実践力を付けるために一単位以上の社会教育実習が必修化されました。

2 社会教育士に求められる力

(1) コーディネート能力(繋ぐ力)

連携や協働を生み出したり、色々な情報や資源や人を繋げたりする能力

(2) ファシリテーション能力(引き出す力)

学ぶ意欲を引き出したり促したり、学びを行動や仲間と繋げる橋渡をしたりする能力

(3) プレゼンテーション能力(伝える力)

地域の課題を共有したり価値を共有したりする時に、相手に届ける能力、情報を発信したり共有したりする能力

3 社会教育実習における求められる力と狙い

社会教育実習では、上述の三つの力を総合的・実践的に学ぶことが期待されています。

各校目指す資格課程としての狙いは同じですが、それぞれ大学によってカリキュラムに特徴があるため、社会教育実習の実施時期は、所属大学や各学生によってタイミングや学年が異なります。それが、受け入れ

先を困らせているのかもしれません。

4 実習を終えた学生からの聞き取り

今年都内の公民館で社会教育実習を行った学生の有志9人に聞き取りをしました。

（１）なぜその公民館を実習先に選んだのか？

多忙の中通うため、居住地域に近く通いやすいことが条件の一つのようでした。先輩から聞く、報告書を読む、授業のゲスト講師などから事前に得た情報で興味を持った等の意見がありました。

（２）実習は実習前の期待通りだったか？

自分の期待通りだった学生が多く、期待と少し違ったという学生は、9人中3人程でした。企画や準備のプロセスをもう少し体験したかったようです。実習時期と企画（委員会）の時期が合わないことは、実習のタイミングがあるので仕方ないことだと思います。

（３）良かった経験・学べた経験

講座の前の打ち合わせや終了後の振り返りに参加できると、その講座の学びの意図・狙い・目的や受け止め方等を直接聞けることが深い学びになり良かったという学生が複数いました。市民との直接交流の部分や打ち合わせや振り返りの場など、会議の場（市民協働の場）を学べたという話が多かったです。

（４）残念だったこと

企画の裏側の実務をもう少し見たかったという意見がありました。講座の見学より、職員の苦労や試行錯誤の実態を見たかったようです。

（５）なぜ活動を継続しているか？

（実習後も関わりを継続している学生への質問）

継続している学生は、9人中4人程いて、多くは障がい者青年学級の継続でした。

理由は、実習の中では準備・企画過程を見ることができなかったため引き続き活動することでそこを知りたい、実習が楽しいから、定期的な活動だとスケジュールが組みやすい、などでした。

5 学生の話から再認識した社会教育実習の価値

広く色々な人がいる公民館で熱意を持って活動する人たちと直接触れ合い話す経験は、大学ではできないため価値は非常に大きいです。また、学生が、講座や事業の当日だけでなく企画・準備・振り返りの過程に参加できることは、とても大事なことで再認識できました。

事業や企画の想いや試行錯誤、読み取り・見取り、受け止め等、学生は同じ場面においても経験が浅いためその場面で起こったことの意味を全ては受け止められないことがあります。そこで、職員がどう受け止めたかを聞くことで、なぜこのようになったのかや、この後の見通しなどを学ぶことができ、貴重な経験になると改めて思いました。

6 社会教育実習必修化に伴う今後の課題

公民館・役所で、実習を前向きに受け止め、位置づけてもらうには、どのような部分をアピールしていけばよいのかを知りたいです。また、公民館側の受け入れメリットについても共通価値を見出したいです。今後課

題を都公連と大学と一緒に考えて、実習を核に大学と公民館が繋がる一つのきっかけにできればと思います。

実習受け入れ先側からは、様々な大学から実習依頼があるが、それぞれ時間数・時期が異なるため、依頼側の情報リストがあれば楽になると言われました。

逆に、大学側としては、都公連側の各館の受け入れ可能時期やお薦め事業がある時期等の情報リストがあると学生に勧めやすいので、今後、情報共有や関係作りを進めたいです。

質疑応答

質問1

先日西東京市で行われた、他の養成課程の先生方との交流の話を聞かせてもらえますか。

回答1：西東京市(山本さん)

12月6日に都公連の調査研究担当理事・大学・実習生の三者会が柳沢公民館であり、傍聴しました。学生から直接自分の考え方が変わった等の話を聞けました。大学側は、学校で見せる学生の顔と社会教育施設・児童館で見せる学生の顔が全く違い、両方の面を見られて良かったようです。また、報告書ではなく直接聞いたことは良い経験とのことで、意見交換会は今後も継続するようです。

質問2

社会教育実習の時間について、実習生が講座の裏側・準備を求めるのであれば、最低8日間程ないと難しいと思います。

回答2：助言者(倉持さん)

制度改正後、社会教育実習は1単位以上になりました。本校では演習も必修としており、演習と実習の両方を行います。大学に

よって単位数も単位時間も異なり、約30～60時間という実習時間数の差が現場の混乱を招く原因だと思います。実習時間数は、規定時間を超えてもよい仕組みであるため、規定時間以上実習を続けている学生もいます。実習時間数を時間どおりとするか、それ以上求めるのかについては、三者の納得感が大切になると思います。

質問3

当市は今年、インターンシップ生を活動中のサークルに入れてもらう時間も設けました。これは大学側から見てどうでしょうか。

回答3：助言者(倉持さん)

インターンシップと実習では違いもありますが、サークル活動に実習生を参加させられる関係性が職員とサークル間にあることは、公民館でしかできないと思います。学生たちは、講座だけが公民館の活動ではないと知っていても、公民館サークル活動とは何かを普段実体験できないので、とてもいい経験になったと思います。感想を聞いたり、サークルの歴史や背景を教える等職員のサポート面を知れば更に学びが深まると思います。

第58回東京都公民館研究大会 第四課題別集会

コロナ禍を乗り越えた公民館活動 ～ピンチをチャンスに～

事例報告者1	西東京市公民館運営審議会会長	西原みどり	氏
事例報告者2	くにたち国際友好会 WING 代表	和田幸夫	氏
事例報告者3	国分寺市もとまち公民館・東京学芸大学教育学部	岩田京佳	氏
		狩野結	氏
		堀越慧	氏
助言者	東京大学大学院教育学研究科准教授	新藤浩伸	氏

企画運営：東京都公民館連絡協議会 委員部会

フェスティバルを DVD にして上映

事例報告者1：西東京市公民館運営審議会会長 西原みどり 氏

1 ひばりが丘フェスティバルとは

毎年3月の第1日曜日は、西東京市のひばりが丘公民館で、午前午後一日をかけて舞台発表が行われます。ひばりが丘フェスティバルです。合唱、オカリナ演奏、朗読劇、ダンスと15分の持ち時間でステージ上は次々とジャンルが移り変わります。日頃公民館で練習している成果を発表しようと、各サークルが力を結集します。また、ロビーでは絵手紙、つるし雛、水墨画などのサークルが展示を行います。一日をあげて文化の香り漂う春の集いとなっていました。

ところが新型コロナウイルス感染拡大で令和2年は準備万端のなか中止、あと1週間ずれば開催できたのに、というタイミングでした。

実行委員会は前年の9月から立ち上がります。ひばりが丘公民館はちょうど開館30周年を迎えていて、本来なら記念イベントがいくつか行われる予定でしたが、予定通りの開催はかなわず、令和3年に行う「第12回 ひばりが丘フェスティバル」はどうしようか、という問いかけから実行委員会はスタートしました。

2 DVDを作って上映会をしよう

9月に召集された実行委員会では様々な意見が出ました。まず、感染拡大で十分練習ができないことがあがりました。人数が多

いサークル、高齢者中心のサークルはなかなか集まることができないため、参加辞退の申し出がかなり出ました。残った少しずつ活動できているサークルで2回、3回と実行委員会を重ね、何としても発表という形は維持しよう、また、展示サークルは直接人と接しなくてもよいので、何とか発表と展示を融合させよう、そのためにはどんな手段があるだろうか？と話し合いました。

一番効果的なのはオンラインで中継配信をすることだが、それに見合うWi-Fi環境が公民館にはなく、不可能だとわかりました。それならば個別に録画したものをつないでDVDを作成し、上映会という形で配信してはどうか、ということになりました。人が密になるのを避けられるし、上映会という静かな中での発表なので、感染対策をしやすいからです。

3 いざ、収録へ

収録をするにあたり、ぶち当たった壁が、著作権という問題でした。DVDという形に残るため、著作権をクリアせねばならず、公民館での上映、入場無料にもかかわらず著作権が発生するものがでてきてしまうのでした。合唱曲の特に海外の作品や、ミュージシャンの歌っているCD使用などは高額の著作権が発生し、演奏曲目や効果音楽などにも注意が必要です。そのため合唱の団体

は参加を取りやめ、手話うたの団体は、上映会でのみ生で CD プレーヤーから音楽を流す方法をとりました。

2 月になって午後半日の収録日を設け、公民館利用者で録画の技術を持つ方に収録をお願いし、ひと団体ずつ録画しました。換気消毒の時間を設けたり、人数制限を行ったりと、感染対策をとりました。

また、展示の部は、事前に公民館職員にお願いして、日頃の活動の様子を写真に収めてもらいました。

4 開館30周年の記念作品として

収録で参加する団体が当初の 10 団体から 3 団体に減ったので、DVD の中に「30 年の公民館のあゆみ」～特に開館時の様子などと、「これまでのフェスティバルのあゆみ」「現在の公民館の様子」を入れることにしました。これで、予定していた 1 時間弱の長さの DVD となりました。

3 月には、参加者向けに 2 回、市民に向けて 2 回、編集してできあがった DVD の上映会が人数制限をして行われました。

「少女たちの手話歌にこころを打たれた」「展示の部の日頃の活動の様子が知れてよかった」「中身の充実した DVD に仕上がっていた」などの感想が寄せられました。

収録まで至らなかった団体も、過去のフェスティバル出演の写真を載せました。

西東京市のホームページの YouTube チャンネルにも掲載され、そのおかげで YouTube に「ひばりが丘フェスティバル」と入力検索すると、この DVD をみることができます。現在は 500 回にせまる再生回数になっています。

なんとかフェスティバルをという思いで取り組んで、結果的に公民館 30 周年とフェスティバルを DVD という形で残すこと

ができたことは、コロナ禍の中でのひとつの記録の形が示せたのではないのでしょうか。



質問 1：（東大和市）ひばりが丘フェスティバルの YouTube 動画の制作とその配信にいたる経緯とご苦労された点をお聞かせいただき、ありがとうございました。東大和市の開館 50 周年記念事業でもネット配信の準備に取り組んでおり、参考にさせていただきます。YouTube の話ともう一方の DVD については、現在、どのような使われ方をしているのでしょうか。

回答 1：ブルーレイディスクと 2 種類をつくっています。それぞれが今、どのように利用されているかまでは把握していません。公民館事業の記録誌とともに DVD でも残すという形を新たに付け加えることができたのではないかと考えています。

意見交換 1：（国分寺市）著作権関連ですが、国分寺市の光公民館ではライブ活動をやっている、過去に演奏を YouTube で配信したことがあります。日本の曲では全部自分でフルに演奏をして声を出しているものについての著作権は OK です、ただ、外国の曲とか JASRAC が管理していないものについてはそうならないので、ご参考

までに。

回答：つけ加えさせていただくと、キッズダンスの子たち用には著作権フリーという音楽があって、それを利用して踊ってもらいました。それから DVD の背景に流している音楽や使用している映像も著作権フリーのものということで、著作権を常に意識して DVD づくりを行いました。

質問2：（助言者）YouTube を拝見して、とてもよくできているなど、内容もですが技術的な点でも驚き、素晴らしいなと思いました。映像制作については皆さんのお仲間に進めたのでしょうか、得意な方がおられたのでしょうか。

回答2：私の所属している吹奏楽団に、いつも映像を撮って DVD を編集する仲間がいて、その方に頼んで、編集してもらいました。見やすいように、飽きないようにということを心掛けて編集してくれました。

質問3：（助言者）撮影も随分手間がかかっているのではと感じましたが、結構長い時間をかけてつくられたのでしょうか。

回答3：パフォーマンスの撮影は半日で終わったのですが、その他は折に触れていろいろな写真を撮るという形で進めました。編集期間は半月くらいで出来たと思います。

意見交換2：（東大和市）日野市も前の年にオンラインで公民館まつりをやっておられますが、このようなネット配信等の取り組みにはいろいろ苦労があったのではないのでしょうか。

意見交換3：（日野市） コロナになって、一旦、公民館まつりは延期にしようという

ことになりました。何かやれることはないのかなということで検討した結果、オンラインでやってみようということになりました。ですが、オンライン機材というものを何も持っていませんでした。あちこちから借り、我々職員も全く操作ができない中で模索しながら、市民の実行委員会の人たちにもいろいろな了解を得ながらやってみたという経緯があります。その時は相談をした館長や教育部の部長たちから、「失敗してもいいからやってみなさいよ」というようなお墨付きの言葉をいただきましたので、遠慮することなく取り組むことが出来ました。

ひとつはこういう会場での音楽の発表をオンラインで生配信を行いました。もうひとつは、各サークルさんの活動のところに入り込んでの撮影、そしてその編集とかには時間がかかったのですが YouTube での配信ということを行いました。それに、オンラインでのシンポジウム開催ということもやりました。どれもやってみたことが果たして上手くいったのかどうかということはありません。また、課題もあります。取り敢えずやってみたということは、いい経験になったし、大きな糧になったと思っています。

意見交換4：（町田市）町田市は公民館と生涯学習センターが一緒になっており、生涯学習センターまつりというものを毎年秋にやっていました、3日間、大体50数団体の参加で、舞台発表と展示で半々くらいです。それが、去年はコロナで開催できず、どうしようかということになりました。他のまつりの類は全てというか殆ど中止の状況となっていました。それでも、やはり多くの人に知っていただける1年に1回の発表

の機会を何とか工夫したいということで、企画・運営の実行委委員会で揉んで、オンラインやインターネット配信でということを検討しました。いろいろ難しいことが出てきましたが、市のホームページにセンターまつりのサイトをつくって、そこに様々な情報を寄せる方法を取りました。それぞれのグループの紹介文、活動の様子や写真や動画などを出してもらい集めました、こちらで編集するので写真だけでもいいですよということにしました。50 数団体ありますが、去年は実際に活動ができていないグループも多かったので、30 数団体の発表になりました。町田市の学習センターは場所もよく、ホールとか音楽室とかの階がワクチン接種会場になっていて使えないという状態が続いています。



今年については、こういうコロナ禍の状況の中で遅れましたが同様な形のインターネット配信を始めました。今年度一杯を目途に後からの掲載でもよい、ということで現在、10 数団体がホームページに掲載されています。いろいろ問合せをしています、2 年続いたコロナ禍の中で去年よりもダメージの大きいサークルが多く、活動ができていない、会がつぶれた、これからどうするか分かりません、そういう声も出ています、そういう状況がありました。少しずつでもいいので、続けて増やしていきたい、できれば去年並みの 30 数団体のまつりでのインターネット配信を考えています。

コロナ禍での国際交流活動

事例報告者2：くにたち国際友好会 WING 代表 和田幸夫 氏

くにたち国際友好会 WING は外国人留学生と地域住民との国際交流を図り、友好と友情の絆を深める活動をしているボランティア団体です。

主な活動は異文化コミュニケーションの会と国際交流イベントです。異文化コミュニケーションの会は月次例会として留学生に自国の歴史・文化などを紹介してもらい異文化を学び合い国際交流をはかります。留学生達に日本のファンになってもらい日本との架け橋になって欲しいと願っています。小さな草の根活動が世界の平和に繋がると確信しています。もう一つの国際交流イベントは一例ですが国立市と共催で国立の子供たちのグローバル人材育成の支援として、子供たちがポーランド大使館を訪問し「日本とポーランドの友好の歴史」を学び合い国際友好の大切さを学んでもらいました。

コロナ禍でこのような活動は出来なくなり会の存続にもかかわる事態になりました。

先行きの見えない状況下で何とかこの活動を継続させたいとの皆さんの強い思いが WING の若き会員と WING の活動に協力してくれている一橋大学生からリモート案が提案されました。藁をもすがる思いでいただけない、とにかくトライアルでやってみようよと即決。

5月23日「今、どうしている？」をテ

ーマに公民館の会議室でテスト開始しました。海外からはインドネシア、台湾、キルギスの留学生が参加、総勢9名で実施。慣れない操作に手間取りましたが6000kmも離れた中央アジアのキルギスからの映像も鮮明で音声もタイムラグを感じないことに驚きました。全世界がリアルタイムでミーティングを行える最新のITテクノロジーの進歩を実感させて貰いました。

これで自信を得て異文化コミュニケーションの会をZoomで行うことが出来ました。6月からロシア、ウクライナ、キルギス、トルコ、インドネシア、台湾、バングラデシュ、ルーマニア、ベトナム、スリランカ、モンゴルとスピーカーが国の内外を問わず参加出来たことは望外のメリットでした。

この中のキルギスを紹介してもらったときにキルギス日本語教師会の代表の方も特別参加されました。キルギスは超親日国で日本語教育が盛ん、今回の日本でのキルギス紹介と私の感想も会報に載せたいとの要望がありました。後日その会報が届き内容を見て驚きました。WINGのこと以外に昨年度の日本語弁論大会の1位から6位までの内容が日本語で書かれており、あまりにも上手な日本語に感心してしまいました。Zoomのお陰で思わぬ方達の参加があり情報と交流が何倍にも広がったことに驚きました。

リモート方式のメリット、デメリットを記します。

メリットは

- （１）スピーカー、参加者は国内外、人数関係なくできる。
- （２）場所が個人個人の家庭になったことで子供も一緒に参加。
- （３）会の開催日時の幅が広がった。
- （４）会員が倍増（しました）。

デメリットはやはり当然ですが会の全体の雰囲気は掴みづらい。発言に触発されて別の発言が続き、話し合いが深まるという場面が少なく、１個ずつの発言で終わりがちなところだ。

質問：町田市

- ・一橋大学と市民は深くつながっていて、公民館と一橋の学生さんがトライアングルになって動いたということが大変興味深く、内容も素晴らしかったです。その方法、組織、主体になっているもの、関係性は友好会の方が公民館にアクセスして、少しずつ進んでいったこともわかりました。
- ・そこで、実際に動いていく、動かしていく活動という点で、学生さんたちはどれ位活動したのか、その関係を教えていただきたいです。

回答・説明

国立市は人口7万6千人位の小さな街です。そんな市民にとって、一橋大学は非常に付き合いやすく身近な存在でもあります。市民活動は公民館が主になってやっていることが多いです。ある時、公民館だよりで一橋大学の先生から「大学と市民の方達とで

本を出版しませんか」との投げかけの記事が載りました。面白そうなので参加したら本のテーマも決まっていなくて話がいろいろと飛んだが結局、道德教育のサブテキストに決まりました。

公民館でそのことを市民に発信し、一橋大学の先生と大学院生、市民で取り組みました。ちょうど、私の孫の小学校で、道德の授業を参観する機会がありました。テーマは「青年海外協力隊のアフリカでの体験」についてでした。授業では、習慣の違いや異文化という観点で展開されていましたが、少し疑問を持ちました。例えば、1890年、和歌山県沖でのトルコ船難破、「エルトゥール号遭難事件」はトルコの学校では、きちんと教科書に載っています。トルコは何故、親日国になったのか…、イランイラク戦争の時に何故、トルコにいた日本人のために飛行機を出してくれたのか、100年ほど前の恩返しをしてくれたのです。小学校高学年の授業を参観し、真の国際交流とは何かを考えさせられました。

トルコ大使館との連携を深めていた頃、コロナ禍と共にイスラム過激派など、宗教上の問題も出てきたため、ポーランドとの交流に切り替えました。

100年来の日本とポーランドの友好の歴史を、パワーポイント化しポーランド大使館へ訪問する中高校生に、事前勉強として、ワークショップで教えたり大使館へも同行したのは一橋大学生のWING支部の学生部長でした。

このように、公民館が市報などで市民に発信し、市民を集める中心になっています。国際交流の予算についてもなかなか難しいですが、行政と話し合いをしています。また、一橋の学生たちが自主的にWING支部を結成し、活動しているのも嬉しいことで

す。卒業後も日本での就職を希望している学生も多いです。

感想：町田市

- 町田市でも相模原市と町田市にある大学とで活動していますが、うまく機能していない現状があり、非常にうらやましいです。



市民がつくる講座～コロナ禍における学生の関わり

事例報告者3：国分寺市もとまち公民館・東京学芸大学教育学部 岩田京佳 氏
狩野結 氏
堀越慧 氏

1 はじめに

東京学芸大学の授業科目「社会教育演習」では、公民館などと連携し、学生（5～6人のチーム）と地域市民が交流・協働して社会教育実践を創り出す活動に取り組んでいます。

国分寺市もとまち公民館、もとまち公民館運営審議会（現・もとまち公民館サポート会議、以下サポート会議）と連携し、市民と学生がともに実行委員会を組織して市民向け講座を企画・運営する、もとまち「市民がつくる講座」の取り組みは、2009年度からスタートし、毎年ユニークな講座を展開してきました。市民や委員からは若い世代の参加で公民館活動が活気づくと好評を得ており、学生にとっては年間にわたって市民と共に活動することを通して社会教育について実践的に学ぶ貴重な場として位置づいています。

2 2019～2020年度の取り組み

2019年度の市民がつくる講座は9月ごろから準備をはじめ、2020年2月29日に「わくわくすごろく探検隊」を実施する予定でしたが、開催4日前に新型コロナウイルスの影響により中止となってしまいました。

2020年度は講座企画にあたり、前年度

中止となった企画を引き継いで行うかどうかの話し合いを学生たちで行いました。話し合いの結果、「もとまちすごろくを使ってもとまち地域について知る」「もとまち地域の魅力を見つける」という昨年度の目的を引き継ぎつつ、新型コロナウイルスの影響なども考慮したうえで改めてブラッシュアップするという形をとることになりました。

7月に行われた第1回サポート会議で学生から提案した際に、コロナ禍による子どもたちの運動不足や、新型コロナウイルスによる地域間交流の減少があるとのこと意見を委員のみなさんからいただきました。それを踏まえ講座を再考し、「地元のことを知る」といった目的に加え、「地域の方との交流」「世代間交流」「コロナ禍による運動不足解消」の3つの目的を新たに加えた講座を行う方針が決められました。

夏から秋にかけて話し合いや準備を重ね、2020年11月1日に、もとまち地域を歩きオリジナルの地図を作成する「みんなで歩こう もとまちクエスト～自分たちだけの地図をつくろう～」を開催しました。当日は地域住民の案内で小学生と共にまちを歩き、公民館に戻って楽しくマップづくりを行いました。

実際に講座の企画・運営を行ってみて、情報共有が上手くいかずに市民と学生の間で

意見が相違したり、まち歩きや地図作りの際に密になってしまったことなどの課題が挙がりました。その一方で、子ども達がもとまち地域について楽しそうに学んでいる姿を見ることができ、子ども・市民・学生の三者の間で世代間交流を行うことができたなど成果も得られ、とても学びの多い講座になりました。

3 2021年度取り組み

（1）経緯

講座作りの当初は、対面での開催を視野に入れつつ、オンライン開催の講座を中心に考えていました。学生同士の話し合いもオンライン会議で行っており、実際の講座に関してもオンラインを意識せざるを得ない状態でした。しかし、対面やオンラインを意識せずに本当にやりたいことを出し合ったところ、自分たちが考えていて楽しいことを講座にしようという意識をもつようになりました。対面での実施を中心に出た意見から、ものをつくることと体を動かすことを組み合わせ、参加者がコマとなって盤上を動くという「巨大すごろく」が誕生しました。

内容がすごろく作りに決まったところで、コロナ禍でできなかった旅行気分を味わってもらおうと考え、テーマを「日本旅行」に設定しました。夏季休暇中も学生同士で役割分担し、オンライン上で講座の骨格を作りました。10月中旬からはもとまち公民館を訪れながら対面で準備を進め、11月には対面で講座を行うことができました。

（2）講座の概要

タイトル：つくってあそぼう！巨大すごろく～日本列島ぐるり旅～

47都道府県を舞台にしてマスを作り、参

加者がコマとなってミニゲームを楽しみながらマスを移動し日本各地を巡ります。

対象：小学3年生～5年生 定員：12名
参加者：17名

1回目：11月7日（日）14：00-16：00
日本列島を調べて巨大すごろくづくり

2回目：11月21日（日）14：00-16：00
巨大すごろくで遊ぶ

（3）当日の様子

11月7日（日）に開催した第1回目講座では、参加者である小学生を中心に地方ごとのグループ（3～4名）に分かれて、すごろくのマスを作成しました。マス作りでは、47都道府県の観光パンフレットから情報を集め各県1マスずつ作成してもらいました。また、大人では考えられないような柔軟な発想や豊かな想像力により、とても楽しくマス作りを終えることができました。

11月21日（日）に開催した第2回講座では、1回目に作成したマスと私達学生が考えたミニゲームのマスを合わせ、部屋全体を使用したオリジナル巨大すごろくで実際に遊びました。8名ずつの2グループに分かれ、2回プレイをしました。

（4）ふりかえり

当初、運営側の学生間のやりとりもオンラインが中心であったため、チームで連携を取ることに自体に苦戦している状態でした。同時に、そのような状況下で「オンラインでも実施できる講座」を企画することに対して大きなプレッシャーを感じていました。

最終的には、感染状況を鑑み、対策を講じながら対面での講座を実施しました。定員を上回る応募者を受け入れたことで、運営側の人手不足に陥り、サポート委員さんな

どに協力していただきながら全2回の講座を無事終えることができました。すごろくを作って遊ぶ活動は、コロナ禍で制限されていた他者との交流を(子ども同士はもちろん、子どもと大人の交流も)実現し、参加者にはコロナ禍での思い出づくりをしていただけたのではないかと思います。

今回の経験を糧に、今後も広い視野で真摯に学びを深めていきたいと思っています。



日頃はおとなの方と話す機会が少ないこと。対話を通して一人ひとりの引出しの豊かなこと、知識の深さを知ることができました。

自分たちだけの地図をつくろう等 町歩きで裏みちには自分たちの知らないことの発見があり、人と関わる歴史も知ることができました。

会場全体を利用した巨大すごろくなどでは、こどもたちがよろこんでくれたこと、笑顔になってもらえたことがやってよかったと思いました。



国分寺市公民館の事例は東京学芸大学授業科目社会教育演習で公民館と地域市民が交流協働して社会教育実践を作り出す活動としてこれからの公民館の姿がよくわかる取り組み報告でした。

質問：今回企画から参加し、実践しわかったこと、振り返るとどんな気づきがありましたか。

私たちはこの2年間で何を経験してきたか

東京大学大学院教育学研究科・准教授 新藤浩伸 氏

1 答えのない模索の2年間

私たちは大きな模索の只中にいます。オンラインコミュニケーションという新しい技術も活用しながら、対面活動を重視してきた社会教育のバージョンアップは可能なのか、「不易」と「流行」の部分はそれぞれ何なのか、答えの出ない模索が世界中で続いています。



情報を通じた学びの場という性格をもつ図書館に比べると（もちろん、本の持つ質感や、図書館という空間の意味もありますが）、ものと人が出会う場所である博物館や、人と人が出会い学ぶ公民館は、苦戦を強いられているように思います。一方で、当たり前であった「集まること」が難しくなった中

で、その意味がいっそう強く感じられるようになってもいます。そのような中で、社会教育に関わる私達は何を考えたらいいのでしょうか。

2 3つの報告から何を学ぶか

- ・作る、演じる、奏でる—生活の中から生まれる表現
- ・場を作る、支えることの喜び
- ・人というものの落ち着き

3 この2年間で私達は何を積み重ねてきたか

- ・『月刊社会教育』（旬報社）の実践から
- ・困難な中での活動の喜び 例：公民館の花壇づくり（福生市公民館白梅分館）
- ・距離が均質化したオンラインコミュニケーション（遠い人とは近くなるが、近い人とは遠くなる？…学生の声）
- ・対面かオンラインかを超えて一本当に大切なことは何か

4 コロナ禍に直面した世界の生涯学習の課題（参考資料①②）

- ・デジタル格差の是正
- ・困難におかれた人達の学習環境の保障
- ・関連組織・機関との連携（学校、福祉、保険等）

- ・対面重視という前提の問い直しとオンライン学習環境の整備

5 2年間の経験を糧にするために

第一に、社会教育がコロナでどう変わったか、と考えるよりも、これまで作り上げてきた制度、構造、地域住民とのかかわりがどう試されたか、その変らぬ意義をどう鍛えていくか、と考えたほうがよいのではないのでしょうか。

第二に、「学びを止めない」というが、住民はもちろんのこと、社会教育の環境整備に関わる私たち自身が学びを止めてはならないと考えます。

第三に、社会教育の原点を問うことです。オンライン化も当然重要ですが、何のためか、いま何を大切にすべきか。それは人間として落ち着きのある時間、空間を守ることではないか—そう私は考えていますが、こうした議論が各地で生まれていくことを望みます。

第四に、私達がこの2年間で経験してきたことを記録することも大きな意味を持つように思います（参考資料③）。

6 私たちは何をめざすか

コロナ禍以降の2020年、私自身は直接集う形の学習を2度だけ経験し（山梨県都留文科大学での尾県郷土資料館（旧尾県学校）へのフィールドワーク、東京都昭島市公民館利用者懇談会学習会）、それまで当たり前だった集まることの意味を改めて考えさせられました。①人と会う、その場に身を置き、みることは、私たちに落ち着きをもたらしてくれる。②人と話すことで好奇心は伝染する。このことを、身をもって感じました。

私たちの課題ははっきりしているように

思います。それは、人々が物理的、社会経済的、精神的に分断されがちな地域社会を結びなおすための活動を、地道に続けることではないでしょうか。

参考資料

- ①「新型コロナウイルス感染症問題へのユネスコの提言—ユネスコ生涯学習研究所のノートから」『月刊社会教育』旬報社、2021年4月号
- ②ユネスコ生涯学習研究所のコロナ対応
<https://uil.unesco.org/covid-19-response>
- ③朝岡幸彦・山本由美編著『「学び」をとめない自治体の教育行政』自治体研究社、2021

質疑応答

オンライン化してよかったことが一つだけあって、博物館の映像を授業で配信するというのをやりました。

東大の近くに「わだつみのこえ記念館」という学徒出陣の『きけわだつみのこえ』の手紙の現物が展示してある小さい資料館があります。例年は直接訪問しているのですが、今回は学芸員の方による館の説明やその関係者へのインタビュー映像、私が記録していた学徒出陣の証言映像などを配信しました。映像は全員に見てもらい、いける人は直接訪問見学もしてもらおうという形で行いました。コロナ前ではできなかったことです。

それにしてもこういう状況の中で学芸大学の皆さんは、このような形で公民館で企画をされて市民の方と、市民・学生・公民館と関わりあって実践されたというのは、本当に素晴らしいと思います。

感想（会場より）

先生の話聞いていて、「落ち着き」の大切さを述べられたが、私もたいへん共感しました。

コロナ禍で人々のふれあいが少ないし、孤独感があって、読書とか好きなものとふれあって心の落ち着く場が大切だと感じました。

わたしの個人的な体験からも、人が生きていくうえで「喜んでもらえる喜びを知る」ことの大切さを特に感じています。今それは何かを書いている最中ですが、コロナ禍で妻を亡くし一人暮らしとなり、ひとり暮らしを実感しています。その中で何か喜びを見出すために書き溜めたものを読み返すと当時のことがよみがえり、非常に心が落ち着く。

やはり人間というものは喜びというもの、生きがいというもの、自分の好きなものに没頭する、それがコロナ禍の状況では大切だと思いました。

先生のおっしゃった「落ち着く」時間の大切さというのは、まさに、ああそうだと共感しました。それと好奇心が伝染するというお話も、わたしもまさに同感です。好奇心をもって何か話をしていると、それは伝染するものだの実感しています。

新藤先生

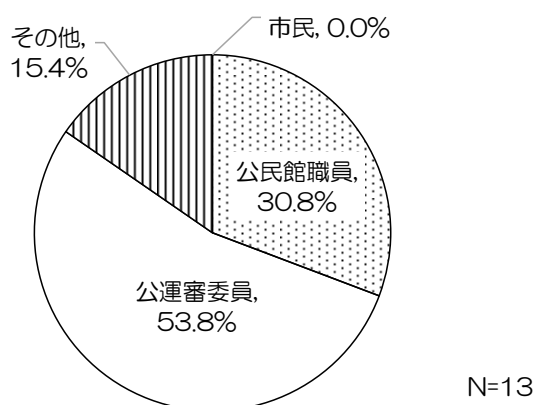
共感ということですが、オンラインコミュニケーションというものは共感が難しいところがあります。画面の向こうで人が笑っていたり泣いていたりは映像としては伝わってきますが、目の前でそういうことが起きていることには代えがたい。共感の場をつくるということも公民館の役割かもしれません。

第58回東京都公民館研究大会 アンケート結果

1 所属を教えてください。

参加者の所属について、回答の割合が最も高いのは「公運審委員」（7人・53.8%）、次いで「公民館職員」（4人・30.8%）、「その他」（2人・15.4%）となっています。（単純回答）

【参加者の所属】



2 第58回研究大会をご覧になられた理由(きっかけ)を教えてください。

研究大会を見た理由について、回答の割合が最も高いのは「講演者に興味があった」（33.3%）、次いで「内容に興味があった」（28.6%）、「大会に興味があった」（23.8%）となっています。（複数回答）

【研究大会に参加した理由】

設問		実人数	割合
1	大会自体に興味・関心があった	5人	23.8%
2	内容（テーマに興味・関心があった	6人	28.6%
3	講演者に興味・関心があった	7人	33.3%
4	その他	3人	14.3%
	計	21人	100.0%

3 第58回研究大会をどのような方法で知りましたか。

研究大会を知った方法について、回答の割合が最も高いのは「その他」（47.4%）次いで、「職員から」（21.1%）、「チラシ」（15.8%）となっています。（複数回答）

【研究大会を知った方法】

設問		実人数	割合
1	チラシ	3人	15.8%
2	HP	2人	10.5%
3	広報紙	1人	5.3%
4	職員から	4人	21.1%
5	友人・知人から	0人	0.0%
6	その他	9人	47.4%
	計	19人	100.0%

4 過去に開催された研究大会に、参加したことがありますか？

研究大会に参加したことのある人の割合は100%となっています。

参加した回数についてみると、「毎回（1人）」、「数十回（1人）」のほか、5回以上が3人となっています。（単純回答）

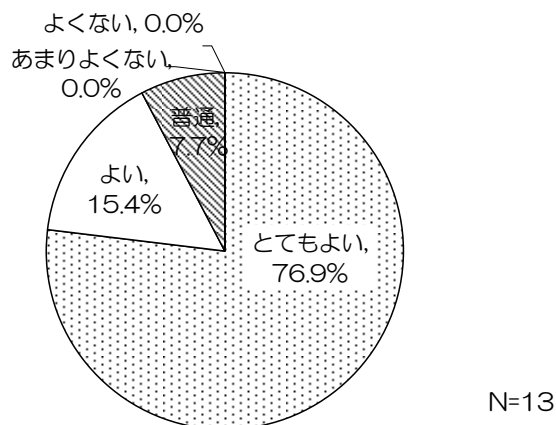
【研究大会に参加した経験】

設問		実人数	割合（%）
1	ある	12人	100.0%
2	ない	0人	0.0%
	計	12人	100.0%

5 基調講演(動画)について伺います。感想を教えてください。

基調講演(動画)に対する感想について、回答の割合が最も高いのは「とてもよい」(10人・76.9%)、次いで「よい」(2人・15.4%)となっています。(単純回答)

【基調講演(動画)に対する感想】



【自由記述】

- 内容的には共感できることが多いが、対面でないので何か物足りなさが残に残念に思われた。
 - 公民館に求められている課題について、具体的にお話いただき、大変参考になりました。
 - 前年度までとは違って、公運審委員・企画実行委員など実際に経験された体験談をもとに講演されたので共感でき、かつ教えていただくことが多くありました。公民館に関わる多くの方々に是非この動画を見ていただきたいですね。
 - 課題別集集に報告書があるのに、基調講演の報告書が掲載されていないのは、なぜでしょうか？原稿執筆要領の「助言者の方をはじめ読んだ方が、その紙面を読めば内容がわかるような原稿となるようご留意ください。」と矛盾を感じませんか？
 - 公民館の基礎条件として、新しいつながり・ネットワークについて再確認することができました。
 - 市民と職員が二人三脚で、それぞれの地域の実情、実績を大事にしながら、公民館の未来を考えていくことは非常に大切だと感じました。
 - 高等教育での「公共と総合的な探究」という観点もその通りです。また、社会人になってからだけではなく、若い世代からの(小さい子ども時代から)社会教育というものへの基礎づくりも大切だと感じました。地域と学校、家庭の連携が、今後、更に必要だと感じました。
 - 人づくり・つながりづくり・地域づくりは、地道にコツコツ継続していくことだと再確認しました。
 - 早くコロナがなくなって前の形態で開催できればいいなあという感じです。
- 動画にレジメも投影されていて、とてもわかりやすかった。

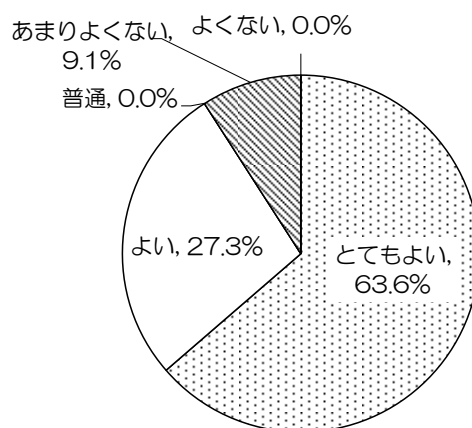
- 今日の各自治体や住民が抱える「地域課題」について、公民館職員として具体的な取組みの提案をいただいた。
- また、これまでの公民館での蓄積してきた「学び合うことが人とつながり、個々人が変わることで地域課題を解決する主体となれる」学習方法が、これからの地域課題解決や解消に向けた決して無駄ではなくむしろ必要なステップなのだという、自信のようなものを感じた。
- 地域課題を解決することと、それに公民館(活動)がどう関わっていくかという点、またこれからの公民館事業の可能性を考える、見直すという点で、示唆に富む内容であった。
- 質疑応答の、田中先生の答えのお話で、福生市の伊東静一氏の話が出たので驚きました。うれしかったです。

6 課題別集会(都公連ホームページ掲載文書)について伺います。感想を教えてください。

課題別集会に対する感想について、回答の割合が最も高いのは「とてもよい」(7人・63.6%)、次いで「よい」(3人・27.3%)となっています。

一方、「あまりよくない」が(1人・9.1%)となっています。

【課題別集会に対する感想】



N=11

【自由記述】

- 4つの課題別とも、コロナ禍において頑張った企画だと思います。
- 内容に対する意見でなく恐縮ですが、弊市のパソコン端末のセキュリティ上、都公連ホームページに掲載されていた課題別集会の資料を閲覧することができませんでした。Google ドライブ？からのダウンロード？扱いとなっているようで、Web ページ上に PDF データを載せて閲覧する形でないと、他にも見ることができない自治体があると思われます。スマートフォンでの閲覧を

試みたところ、1つあたりの容量が大きく、私用端末容量の負担になるなど、職場での閲覧に向かないため、来年度以降はPDFデータの掲出をGoogleドライブでない方法でご検討いただけますと幸いです。

- 第4課題別集会を確認しましたが、このコロナ禍でよくやったかと感心しました。この様な発表を見て、わが市でももっと出来るのではないかと感じたし、やれねばならないと思いました。どれも参考になりました。発表者、また実際にやられた方に拍手を送りたい。
- 現地での参加ができませんでしたが、掲載文書がわかりやすくまとまっていて、大変参考になりました。
- 4つの課題別集会の開催方法の足並みが揃っておらず、コロナ禍での開催とは言え、オンライン会議システムの導入等、積極的に取り組むべきだったのでは。
- コロナ禍でのそれぞれの課題別のまとめを拝見し、「学ぶ・つなぐ・活かす・ひろげる」と言うことを柱とし、地域の声に耳を傾け、「いつでも どこでも だれでも学べる」生涯学習の理念を再確認することができました。
- 公民館が紡ぐ「つながり＝ライン」が未来を創っていくのだと思います。手段として、オンラインも大変有効だということが実証されました。それと共に、「対面」という、人のぬくもりも一層大事にしていきたいと感じました。
- 早くコロナがなくなって前の形態で開催できればいいなあという感じです。
- 持ち寄られた実践は、困難の中でできることを探るもので、とても感銘を受けました。公民館が市民の心の拠り所、落ち着きを感じることで集いの場になっていることがよくわかりました。『月刊社会教育』（旬報社）2022年2月号にていくつかの報告事例を紹介させていただきました。（新藤浩伸「感性を育み、共感の場を創るために」）
- 発表内容、質疑応答の内容が充実していて、また、読みやすいレイアウトになっている。
- 以前の公民館職員からすると、個々の自治体だけで情報の取り扱いをすればよかったが、今日の社会的背景からすると、学習の質的領域からも情報の広がりを持って対応を求められている。これらのことに対応するために、ホームページでの情報発信は当然であり、対応されている職員の皆さんの努力には敬服する。
- 第四課題別集会は、昨年度がコロナ禍の中で公民館職員の方々がピンチの中で取り組んだ2事例（町田市、国立市）であり、今回（第58回）がコロナ禍のピンチの中で取り組んだ市民（利用者）の活動3事例となった。
- コロナ禍の中、ややもすると「安全・安心を優先」の名目で、立ちすくんだり、歩みを止めてしまう公民館や公民館活動が見受けられる中で、それぞれ努力された「ピンチをチャンスに」を示せた内容となっていました。
- ホームページ公開が24日9時からとなっていました、しばらく掲載されていなかったと思います。夕方になって見ることができました。遅れるようなら、その旨を掲載してほしかったです。

7 本大会は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、動画配信と事例報告等のホームページへの掲載による開催となりました。実施手法をはじめ、大会全体の感想や今後の公民館活動のあり方に対するご意見などを教えてください。

【自由記述】

- ・基調講演の動画はよくできていました。聞きやすく、見やすかったので話の内容がよくわかりました。これからの動画配信の参考になるかと思います。
- ・現在の状況では、現地での開催は難しいので、オンライン開催でよかったと思います。今後の開催時期については、2月ではなく比較的感染状況が落ち着いている時期での開催も検討してもよいと感じました。
- ・令和2年度は、コロナ禍での開催で混乱が見られたのは承知しているが、それを踏まえた上での令和3年度の開催だったはずです。子どもはオンライン授業、社会人はリモートワークの利用が高まり、全体として、開催要項の副題「市民と職員をつなぐ対話とは」に応えた内容になっていたでしょうか。
- ・令和4年4月20日に、総会が予定されています。各市、令和3年秋には、翌年度の予算計上はしており、繰越金がほぼない中で何ができるか、道筋を示された上で、開催願います。
- ・事務局から、企画委員会の要録がまだ提出されてない回があります。当市では、企画委員会の要録でもって、公民館運営審議会の委員へ報告をしているので、至急、お願いします。
- ・挨拶や祝辞の文書と、報告書のフォントの統一が図られていません。
- ・2年目のコロナ禍での規制の多い中で、動画編集、事例報告のまとめがホームページ上に掲載され、奥行きのある素晴らしい資料になったと感じます。
- ・このホームページの存在を一般の市民、都民、全国の多くの方に周知していくことは難しいかもしれませんが、まずは、ホームページ作成に関わった一人ひとりの声掛けが大事だと思います。HPを作成したことで完結してはならないと感じます。
- ・どのように活かしていくか、オンライン・オンサイトの観点からも、広め、活かし、つながるものにしていかなければならないと思います。
- ・公民館の主役は地域の住民であるという原点に戻ることも大切だと感じました。
- ・実施の形態については、コロナが続くようであればこのような手法も仕方ないのかな、と思う。公民館がどのように地域課題を吸い上げ、向き合っていくべきか、常に思考したいと思います。大変な状況のなかでよくぞ開催してくださいました。関係の皆様のご労苦に心からの敬意をお伝え致します。
- ・テーマの設定が今まさに求められている内容だったので、どの報告も興味深く感じた。
- ・基調講演の編集もたいへんわかりやすく仕上がっていて、臨場感があつた。
- ・職員にとっては、新たな領域への対応を求められてきたと思われる。自治体としては、情報発信を求められているが、求めているのは自治体の住民を超えて全世界の住民であることを意識せざるを得ない、という視点を持つ職員が求められているという状況を意識する必要がある。その意味では、動画配信やHPを利用した取り組みは、今後のスタンダードになっていくと思われるので、今大会は、その意味でも貴重な経験となったと思われる。

- 基調講演動画について、講演者と講演資料が同時に視聴できるように編集・工夫されており、講演内容の理解を手助けする上で大変によい方法でした。講演を会場で聴く以上に、効果が高い方法であると感じました。誰もが再視聴できるという点でも。
- 第二課題別集会も動画で載せていて、うらやましかったです。技術面、環境面で各市に格差があると思います。コロナ禍でオンラインが十分に生かせる市と、そうでない市に分断が起きてしまうのは残念です。
- 私たちが担当した第四課題別で助言者の新藤浩伸先生が、オンラインでは遠くの人が近くに、近くの人が遠くに感じるとおっしゃったことが印象的でした。私は、公民館は実際に人と人がそこでつながる場所だと思っています。都公連のホームページをもっともっとPRしてください。市役所は用事がないと行かないけれど、公民館は誰もがふらっと行ける場所であってほしいと思います。